

マックス・フリッシュ『ビーダーマンと放火魔たち』

—「教訓のない教訓劇」と経済格差の問題—

寺澤大奈

はじめに

『ビーダーマンと放火魔たち——教訓のない教訓劇』(1958)¹の初演から7年が経過した1965年、スイス人作家マックス・フリッシュ(1911-1991)は、劇作家としてもすでに揺るぎない地位を確立していた。ところがこの年にドイツ・バーデンヴュルテンベルク州からシラー記念賞を授与されたフリッシュは、受賞講演のスピーチで意外にも、既存の演劇ならびにドラマトゥルギーに対する不快の念を表明する。むろんフリッシュはかつては、熱心な演劇愛好家だった。15歳のときにフリードリヒ・シラーの『群盗』を見て感銘を受けた少年は、たちまち演劇に熱中するが、そのころの彼にとってはまさに、「舞台は出来事(Ereignis)」だった。生き生きとした今(Jetzt)だった。」(SR: 363)ところが時代は経ち、『ビーダーマンと放火魔たち』(1958)や『アンドラ』*Andorra*(1961)によって劇作家としても大成功をおさめた1965年のフリッシュにとって、演劇はどんなに前評判の高いものであろうとも、もはや「出来事」ではなかったのである。劇場に足を運ぶことがめっきり減ってしまったうえに、たとえ足を運んだとしてもそれは、ただしぶしぶの友達づきあいに過ぎなかった。演劇はもはやかつての「恍惚(Verzückbarkeit)」

¹ 『ビーダーマンと放火魔たち』のテキストは、本稿においては次のものを使用する。Frisch, Max: *Biedermann und die Brandstifter. Ein Lehrstück ohne Lehre.* In: *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge.* Bd. 4. Hrsg. v. Hans Mayer unter Mitwirkung von Walter Schmitz. Frankfurt a. M. 1998, S. 325-389. 今後は一般に『ビーダーマンと放火魔たち』もしくは『ビーダーマン』と表記する。この作品からの引用は本文の括弧内に頁数のみを記す。またフリッシュのその他の作品からの引用も、特別な断りのないかぎり同じこの『時系列著作集』を使用する。作品の年号は、散文に関しては初版の出版年を、戯曲に関しては初演の年を挙げる。本稿で引用するフリッシュのその他のテキストのうち、この著作集に収められているものは以下の通り(引用に際しては、本文の括弧内に略号と頁数を付記)。

Nun singen sie wieder. In: *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge.* Bd. 2, S. 79-136. [略号=Ns]

Tagebuch 1946-1949. In: *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge.* Bd. 2, S. 347-755. [略号=Tb]

Herr Biedermann und die Brandstifter. Hörspiel. In: *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge.* Bd. 4, S. 275-323. [略号=HB]

Schillerpreis-Rede. In: *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge.* Bd. 5, S. 362-369. [略号=SR]

Illusion zweiten Grades. In: *Gesammelte Werke in zeitlicher Folge.* Bd. 5, S. 476-479. [略号=Iz]

(SR: 364)ではなく、今や「不快 (Unbehagen)」(SR: 364)なものになってしまった。ここでフリッシュは正直に告白する。見るだけでなく、書くことの不快も感じていると。

紳士淑女のみなさま、あなたがたはおそらく次のような疑惑を抑えられないに違いありません。こんなにも軽蔑した口調で、また軽はずみかつ不当に演劇のことを語る語り手は、ひょっとしたら、なによりも自分自身にとって戯曲を書くことが嫌になってしまったのではないか。この疑惑を否定することはできません…… (SR: 365)

劇作家としての将来をも脅かしかねないこの「不快」の正体は、フリッシュによれば「寓話の不快 (das Unbehagen in der Parabel)」(Iz: 477)であった。² 演劇は現実の模倣ではなく、「意識という舞台における現実の解釈」(Iz: 476)であると考えていたフリッシュは、演劇をイミテーションから解放するために寓話という形式を試みたのだが、この試みは一定の成功と引き換えにひとつの欠点を伴っていた。その欠点こそフリッシュが「意味付けへの傾向 (Hang zum Sinn)」(SR: 368)³ と呼んだものにほかならない。フリッシュは言う。「寓話 (Parabel) は意味を酷使してしまう、そのために演劇は、以上で証明終わり (Quod-erat-demonstrandum) ということになりがちである。」(Iz: 477)——Walter Höllerer に宛てた 1969 年の手紙のなかでフリッシュは、同じことを次のように表現している。

わたしの以前のすべての戯曲は、成功の度合いにはそれぞれ差があるにせよ、信憑性を次のようなところに求めていました。つまり寓話 (Fabel) を偶然ではないものとして示すこと、その都度に与えられた条件のもとでそれが必然的なものであると示すことです。ビーダーマンに関して言えば、彼があのような環境にいたのであれば、ど

² 日本語の「寓話」に該当するドイツ語としてフリッシュは、ここの Parabel のほか Fabel という語も用いている。Duden 辞書などを参照すると、一般的には前者は人間が主役、後者は動物が主役とされるが、フリッシュに関しては複数のテキストを比較参照したところ、両者は区別なく使用されているようである。たとえば同じ『ビーダーマン』に関しても、Walter Höllerer に宛てた 1969 年の手紙ではこれを Fabel と表現し、1976 年のパリ公演の際に寄せた『寓話とは何か?』Que signifie la Parabole? という小文ではこれを Parabel と表現している。Vgl. Frisch, Max: *Dramaturgisches. Ein Briefwechsel mit Walter Höllerer*. Berlin 1969, S. 19; Frisch, Max: Que signifie la Parabole? In: *Théâtre de la Ville*. Nr. 31 (1976), S. 10. Übers. aus dem Frz. von Eva Moldenhausner: Was bedeutet die Parabel? – Zit. nach: Schmitz, Walter (Hrsg.): *Materialien zu Max Frisch. Biedermann und die Brandstifter*. Frankfurt a. M. 1979, S. 70-74. そのため本稿では両者に共通して「寓話」という訳語を当て、うしろの括弧内に原語を記すことにした。

³ Höllerer に宛てた手紙にもこの表現が見られる。「やっぱりそうなんです。寓話 (Parabel) はたいいてい回収されてしまうんです。意味付けへの傾向 (Hang zum Sinn) です。寓話は説明可能性を装います、少なくとも必然性を。」Höllerer, S. 19.

うしてもあんなふうに愚か者としてふるまうほかなかった、ということを緻密に示せば示すほど、それだけいっそう作品は納得いくものになるだろう、ということだったのです。(…) このドラマトゥルギーでは偶然が介入する余地はありません。⁴

『ビーダーマンと放火魔たち』や『アンドラ』の成功を支えた「このドラマトゥルギー」(フリッシュはこれを「摂理のドラマトゥルギー (eine Dramaturgie der Fügung)」(SR: 366) と呼んだ) への不快感こそ、まさにこれらの作品によってシラー記念賞を受賞した作家が感じた「寓話の不快」にほかならない。「寓話の不快」を克服するために試行錯誤したあげくフリッシュは、シラー記念賞受賞の前後に「不信のドラマトゥルギー」(SR: 368) ないし「順列の演劇」(SR: 369) という新しいドラマトゥルギーを着想し、それはやがて戯曲『伝記——ひとつの演戯』*Biografie: Ein Spiel* (1968) として結実することになった。⁵

以上の前提を踏まえたうえで本稿が取り組むべき課題は、まず第一に、シラー記念賞受賞時にフリッシュが感じていた「寓話の不快」の正当性を、『ビーダーマンと放火魔たち』のテキストを分析することによって示し、のちに『伝記——ひとつの演戯』へと向かっていく作家の歩みの必然性を立証することである。(1章、2章) 上述した Höllerer 宛の手紙の文言を借りるならば、ビーダーマンが「あのような環境にいたのであれば、どうしてもあんなふうに愚か者としてふるまうほかなかった」ことや、この寓話に偶然が介入する余地はなく、「その都度に与えられた条件のもとでそれが必然的なものである」こと、つまりビーダーマンが「摂理のドラマトゥルギー」によって動かされていることを確認できたならば、この課題は達成されたことになるだろう。その際に行動の必然性を決定付ける「環境」因子として、本稿では一貫して「経済格差」(貧富の差) に着目する。具体的には1章ではビーダーマンが放火魔を屋根裏部屋に上げてしまうまでの、また2章では放火魔が実際に火を放つまでのビーダーマンの言動に注目し、ビーダーマンと放火魔とのあいだに存在する貧富の差が、いかにして放火へとつながっていくのかを考察する。

続く3章では「彼があのような環境にいたのであれば、どうしてもあんなふうに愚か者としてふるまうほかなかった」ことが1章と2章で確認されたことを踏まえたうえで、それならば放火というカストロフは絶対的に不可避のものであったのか、という問題意識から出発する。1章

⁴ Höllerer, S. 12.

⁵ 葉柳和則は1965年のシラー記念賞受賞講演を、フリッシュのドラマトゥルギー上の転回を端的に示すものと位置付けたうえで、『ビーダーマン』『アンドラ』から『伝記——ひとつの演戯』に至るまでのフリッシュの演劇上の試みを丹念にたどり、試行の行きづまりや挫折を理論と実践、想定と現実の齟齬に関連付けることによって、小説と戯曲の共通点と相違点という問題圏にまで考察を進めている。本稿「はじめに」はこの論考に負うところが大きい。葉柳和則『経験はいかにして表現へともたらされるのか——M・フリッシュの「順列の美学」』鳥影社 2008年、85~112頁(第一部第三章「順列の美学」) 参照。

と2章で確認されたのはただ、原因と結果の結びつき、つまり因果関係の必然性に過ぎないことを考えたとき、それでは原因を変革すれば、つまり「彼があのような環境にいた」その「環境」を変えることさえできるならば、カタストロフは防げるのではないだろうか、という可能性にたどり着くだろう。本稿の提示する枠組みに則るならば、「環境」とは経済格差のことであった。経済格差をなくすという発想は、可能性として資本主義と共産主義の議論に接続していく。論文全体としての最終的な目標は、『ビーダーマンと放火魔たち』が「教訓のない教訓劇」である所以を、経済格差の観点から解き明かすことである。

1章 貧富の差は放火魔をいかにして屋根裏部屋へと導いたのか?——「人間」という罠

『ビーダーマンと放火魔たち』の主人公、ゴットリーブ・ビーダーマン Gottlieb Biedermann は、名前の示すとおり実直 (bieder) な人柄をもって自他ともに任じている。たとえば第1場⁶でビーダーマンは、部屋⁷に上り込んできた放火魔シュミッツ Schmitz によって次のように評される。「実直な性格」で、「ポジティブな考え」を持ち、「自己の信条を公にする勇氣」と、さらには「良心」を備えている。(332) この評価に対してビーダーマンは、そのたびに追認するような返答をしている。「もちろん (Gewiß →)」、「たしかに (Sicher →)」、「そうそう、むろん (Jaja, natürlich →)」(332f.)。また第3場でもう一人の放火魔アイゼンリング Eisenring⁸は、警察に自分たちのことを通報する絶好の機会を逃したビーダーマンを評して「善良そのものの人だ (Eine Seele von Mensch.)」と述べ、それを受けてシュミッツは「そう言っただろ?」と応じている。(355) さらにビーダーマンの妻バベッテ Babette は、第4場で次のように独白する。「いつだってそう。わたしはゴットリーブのことを知っている。いつだって彼はあまりにお人よしのよ (gutmütig)、ああ、とにかくあまりにお人よし!」(369)⁹

ところがいつぼうで、従業員クネヒトリング Knechtling に対する社長ビーダーマンの非情な態度が明らかになるにつれ、この「お人よしのビーダーマン」という設定はしだいに疑わしいも

⁶ 『ビーダーマンと放火魔たち』はプロローグに当たるシーンと、第1場 (Szene 1) から第6場 (Szene 6) までで構成される。

⁷ 『ビーダーマン』の舞台であるビーダーマン宅は、部屋 (Stube) と屋根裏部屋 (Dachboden) の二層構造である。

⁸ シュミッツならびにアイゼンリングが放火魔であることは、実際には幕が上がる直前によく確定する。もっともビーダーマン本人にも最初から「疑惑」は兆していた。第5場でビーダーマンは観客に向けて語る。「疑惑! それはすぐに持ちましたよ、疑惑はいつも持っているものです。」(373)

⁹ 「お人よし」であることが破滅を招くという『ビーダーマンと放火魔たち』の最も基本的な定式を、フリッシュはすでに『日記 1946-1949』で次のように表現している。「良いことを押し通して実現させようとするか、良い人間であろうとするか、そのふたつは別のことであり、互いに相いれないものである。(…) 良いことを欲する人々が、自分たち自身は悪い人にならないかぎり、悪は栄えるのだ!」(Tb: 565) 「悪い人」になれなかったお人よしのビーダーマンによって、放火という悪は招かれたのである。

のになっていく。第1場でクネヒトリングが面会を求めた際、ビーダーマンはいら立ちのあまり次のように叫んでしまう。

ビーダーマン (….) クネヒトリング! クネヒトリング! クネヒトリング、頼むからわたしを休ませてくれ、ちくしょうめ、さもなくば弁護士を雇えばいいさ。(….)
そう! 弁護士を雇えばいいんだ。どうぞだ! わたしだって弁護士を雇ってやる。発明に対する分け前だと。やつはガスコンロの下に身を横たえるか、あるいは弁護士を雇えばいいんだ。(336)

2人のあいだには何があったのか。この場面よりすこしのちに明らかになることによれば、ビーダーマンは毛生え葉の製造会社を経営していて、クネヒトリングは会社の古くからの従業員だった。社長はその働きぶりに長いあいだ満足していたのだが、そのうちにある毛生え葉がヒットして、その利益の分け前をクネヒトリングが要求してきたのである。ビーダーマンはこの要求をはねつけ、さらにクネヒトリングを解雇してしまった。病気の妻と3人の子供を抱えて困窮したクネヒトリングはビーダーマンの家を訪ねるが、取り合ってもらえない。(第1場上記引用箇所) 万事休したクネヒトリングはついに「ガスコンロの下に身を横たえ」て自殺してしまう。(第3場) 夫の死後クネヒトリング夫人がビーダーマンの家を訪ねてくるが、「死者にかまっている時間はない」(370)と言われて追い払われてしまった。(第5場)

ビーダーマンにおけるこれらふたつの側面、お人よしという表の顔と冷酷な実利主義者という裏の顔は、互いにどのような関係性にあるのだろうか?¹⁰ ビーダーマンは機嫌の良さしによって態度を変えているわけではなく、その「顔」には一定の規則性が認められる。その規則がどのようなものか、作品内で客観的傍観者として位置付けられるコロス¹¹は、第3場で次のように歌っている。

¹⁰ ビーダーマン本人もこれらふたつの顔を「違う顔」として認識していることは、第2場冒頭近くの次のような発言から明らかである。「わたしはお人よし過ぎる、君〔バベツェ〕の言うことは正しい。クネヒトリングのやつめ、きっと首をへし折ってやるかな。」(341)〔〕は執筆者の補足。以降本稿において、〔〕は執筆者の注、もしくは補足である。

¹¹ 『バーレスク』(1948)『ラジオ劇ビーダーマン』(1953)と続く「ビーダーマン・コンプレックス」において、コロスは本稿が主として論じる『ビーダーマンと放火魔たち』にはじめて登場する。(「ビーダーマン・コンプレックス」に関しては後述。注32参照) ここから遡ること10年余、第二次世界大戦終戦の年にフリッシュは、戯曲『ほらまた歌っている』*Nun singen sie wieder* (1945)がチューリヒ劇場で初演されるに当たって、『時事問題と文学』*Über Zeitereignis und Dichtung* (1945)と題する小文を寄せているが、ここでは古典劇に登場するコロスの役割が、戦争に直接的には関与しなかったスイスの立場に重ねられている。直接に苦しみことはなくそのため復讐や憎悪の念とは無縁のスイス＝コロスは、かえってそれがゆえに、客観的な判断者として当事者から広く意見＝歌に耳を傾けてもらえるとフリッシュは述べる。

コロス 本当にたいへんだ、市民¹² というものは！

つまりビジネスでは厳しく (hart im Geschäft)、
でもそれ以外では本当にいい人で、
良いことをしようと喜々として準備。 (359)

つまりビーダーマンの「顔」は、「ビジネス」か「それ以外」か（本稿では便宜上、後者を「プライベート」と呼んでおく）によって使い分けられており、プライベートの場合には「実直なお人よし」である反面、ビジネスの場合には血も涙もない冷酷な一面を見せることがある。¹³ このような基準が読者（観衆）に明示的に示されるのは上に示したコロスの合唱（第3場の終わり近く）まで待たねばならないが、この基準を把握したうえで第1場を読み直すことによって、初読のときにはおそろしく気づくことのないフリッシュの仕掛けが明るみに出る。つまりこの「基準」に照らしてはじめて読者は、「ビーダーマンが放火魔シュミッツを家に迎え入れてしまったこと」が偶然ではなく、必然・不可避のものであったことを十全に理解しうる。

以上のことを文脈に則って、できるだけ具体的に示すことを当面の目標としたい。だがその前の準備作業としてもう一点、ビーダーマンの重要な「属性」を押さえておかねばならない。それはビーダーマンの「富める者」としての属性である。

まずはビーダーマンが「富める者」であることを示す、物質的・客観的な指標をいくつか挙げておこう。アンナ Anna というお手伝いの女性を抱えていること。毛生え薬製造業を営んでいること、またこの毛生え薬がヒットして利益が発生したこと。地下貯蔵庫に高級ワインを保有していること。シルバー製・クリスタル製の種々の高級食器や高級織物などを保有していること。

しかしながら物質的・客観的な指標よりもさらに重要であると思われるのは、ビーダーマン自

¹² 『バーレスク』(1948) から『ビーダーマン』(1958) までの10年間はフリッシュの実人生にとって、かつて建築家という職業や結婚などによって体现されていた「市民性」からの脱却の時期であった。『ビーダーマン』において展開される市民性への批判はこのような背景を持つ。Vgl. Hage, Volker: Max Frisch. Reinbek bei Hamburg 2011, S. 34, 51, 54; Arnold, Heinz Ludwig: „Was bin ich?“ Über Max Frisch. Göttingen 2002, S. 35.

¹³ このビジネスとプライベートの二重性を「分裂病（統合失調症）」(Schizophrenie) とみなす論者は多い。Walter Schmitzはこのように実生活と表向きイデオロギーが相反する事態を「倫理的分裂病」(moralische Schizophrenie) と呼んでいる。またこの「分裂」状態が舞台上の具体的な出来事に表れている例として、たとえば Werner Weber はあべこべになった「花輪事件」（第5場）を挙げているし、Hans Bänziger は舞台設定（居間と屋根裏部屋の二層構造）や言語の差異（登場人物たちとコロスの言葉遣いが異なること）にこの「分裂」を見ている。Vgl. Schmitz, S. 9-26, hier S. 12; Weber, Werner: Zu Frischs „Biedermann und die Brandstifter“. In: Schmitz, S. 163-166, hier S. 165; Bänziger, Hans: Zwischen Protest und Traditionsbewußtsein. Arbeiten zum Werk und zur gesellschaftlichen Stellung Max Frischs. Bern 1975, S. 58, 69.

身がみずからを「富める者」として位置付けている事実、その自己認識である。第4場で放火魔を夕食に招待しようとして屋根裏部屋に上がっていったビーダーマンは、アイゼンリングに向かって次のように話す。

ビーダーマン (…) 率直に言って遺憾に思いますのは、下層階級の人に限っていまだに階級格差うんぬんなどと言っていることです。こんにちではわたしたちはみな、貧しい者も富める者も関係なく、同じ造物主からの被造物ではありませんか？ 中産階級もまたそうです。わたしたち、あなたとわたしは、肉と血からなる同じ人間じやありませんか？ (364)

このようにアイゼンリングを「下層階級」「貧しい者」として位置付けるいっぽう、ビーダーマンは自分自身をその対極として、富める者として認識していることがうかがえる。

ここまでにしてきた準備をここで整理しておく。ビーダーマンはプライベートでは実直でお人よしの性格だが、ビジネスでは冷酷な実利主義者である。これを以下「ビーダーマンの特性Ⅰ」と呼ぼう。またビーダーマンは「富める者」であり、また自分自身でもそのように認識している。これを以下「ビーダーマンの属性Ⅰ」と呼ぼう。以上の道具立てを踏まえたうえで、第1場でビーダーマンが放火魔シュミッツをなぜ家に上げてしまったのか、またなぜワインと料理でもてなしてさえたのか、以下にその必然性を検討し、明らかにしたい。

第1場冒頭。ビジネスを終えたビーダーマンは午後の9時ごろ、居間で新聞を読みながら葉巻を吸っている。そこにお手伝いのアンナがワインを持ってくる。(以上、プライベートの時間・空間であることの示唆) 町では近ごろ放火事件が頻発しており、今日の新聞もまた新たな一件を伝えているが、それによれば犯行はまたもや今までと同じ手口で行なわれた。つまり「行商人(Hausierer)」が家に入り込んで屋根裏部屋に居座り、やがて放火するのである。アンナはここでビーダーマンに、「彼」がまだ帰らないということを伝える。「彼」とは1時間ほど前にやってきた行商人で、ビーダーマンと会って話がしたいと言っているらしい。商談(ビジネス)には明日やってくるように言いなさいとビーダーマンはアンナに指示するが、アンナによれば「彼」はビジネスなんかには興味がないという。毛生え葉が欲しいわけではないとのこと。それでは何が？ と尋ねるビーダーマンにアンナは答える——「人間らしさ(Menschlichkeit)」(329)と。

ビーダーマンはこう言われてもなお、「彼」にすぐに帰れと伝えるよう指示するが、ここでワインのコルクの匂いを嗅ぎ、さきほどの言葉を反芻し(「Menschlichkeit!...」(329))、ワインを一口飲んでから、「玄関ホールで待つように言いなさい。すぐに行くから」(329)と態度を軟化させるのである。

このあと断りもなく部屋に上り込んできたシュミッツに対してビーダーマンは、「何をお望みですか?」と尋ねるが、シュミッツは答えて、「ビーダーマンさん、ご心配は無用です。わたしは行商人ではありませんから!」「では?」と問うビーダーマンに「職業はプロレスラーです」と答える。もっとも現在はプロレスラーをやめて「無職」であることが明かされ、若干の間を置いてさきほどと同じセリフをシュミッツは繰り返す。「ビーダーマンさん、ご心配は無用です、わたしは仕事を探しているわけではありませんから」。(330)

これら一連のやりとりに隠された意味は何か、またその意味はビーダーマンの言動にどのような効果をもたらしたのか? ビーダーマンはメディア情報(新聞)によってちかごろ放火事件が頻発していること、それらの事件がどれも似たような手口で——行商人が屋根裏部屋に上がり込んで放火——行なわれていることを知っている。そこへあろうことか「行商人」がやってきた。当然ながらビーダーマンには疑惑が生まれる。ところがこの「行商人」は、ビジネスに來たのではない、そうではなく、「Menschlichkeit」を求めに來たのだという。ここでビーダーマンのかたくなな態度は軟化するが、この軟化の理由はどう説明されるだろうか?

まずは「行商人」という職業にどのような意味が付与されているかを検討してみたい。町では放火が横行している、放火はいつも行商人によってなされている、という情報から「行商人=放火魔」という等式が成り立つのは自然であるし、ビーダーマンを強く捉えるのもこの等式にほかならない。ところが「行商人」という職業には、少なくともビーダーマンにとっては、もうひとつ別の重要な意味が付与されている。それは「放火」から離れた行商人の本来の仕事——物を売ったり買ったりすること——に関係している。つまり「行商人」であることはビーダーマンにとっては、プライベートではなくビジネスの領域に属することを意味し、したがって「ビーダーマンの特性Ⅰ」によれば、そっけなく、あるいは冷酷に扱われてしかるべき存在である。クネヒトリングの一件に見られるように、この存在には「人間らしさ/思いやり (Menschlichkeit)」など向けられる余地はない。

ところがこの「行商人」は、「ビジネスに興味がない」「毛生え薬が欲しいわけではない」という。この発言は単なる事実の叙述ではなく、少なくとも今日に関してはビジネスの人間ではないこと、プライベートの人間として扱ってほしいことのアピールにほかならない。このアピールは実際にいくらか功を奏したに違いない。「Menschlichkeit」という言葉によってビーダーマンの態度が軟化したことがその証明である。そしてこの「Menschlichkeit」あるいは「人間 (Mensch)」という概念こそ、ビーダーマンのプライベートの領域における最大のアキレス腱であり、また本稿の題目である「格差」と密接な関係性を持つものだが、このことに関してはまたのちに触れることにしたい。

「ビーダーマンさん、ご心配は無用です。わたしは行商人ではありませんから」(330)——続

く場面における「行商人」のこの発言の意味は、以上のことを念頭に置けば明確であろう。「行商人でない」こと、それは「放火魔ではない」ことを意味する¹⁴のみならず、続く「職業はプロレスラーです」という発言とあわせて、この何某かが本質としてプライベートの人間であること、ビーダーマンとビジネスの利害関係を持たないことを意味している。「行商人」はこの瞬間ビジネスマンとしての性質を脱ぎ捨て、「シュミッツ」へと変貌を遂げたのであった。ところがこの「本質」は、続く「〔プロレスラーをやめて今は〕無職です」(330)というシュミッツの発言によって、ふたたび動揺にさらされる。無職の人間が仕事を探しに訪ねてきたのではないか、つまり求職目的の訪問(ビジネス)ではないのか、という疑惑がビーダーマンに兆したのである。もっともこの疑惑は続くシュミッツの発言「ビーダーマンさん、ご心配は無用です、わたしは仕事を探しているわけではありませんから」によってすぐさま払拭される。これ以降シュミッツはビーダーマンにとって完全にビジネス外の人間に分類され、思いやりやあわれみといったビーダーマンのプライベートな性質が向けられる対象となったのであった。¹⁵

「無職です」というシュミッツの発言は、彼のプライベートな立ち位置が確定した今、ビーダーマンに対して純粹に感傷的な作用を及ぼすことになるが、この「感傷的な作用」が「プライベートな立ち位置」限定のものであることを、わたしたちはクネヒトリングの一件を参照することで確認しておきたい。忠実な従業員だったクネヒトリングはビーダーマンによって解雇されて「無職」の状態に陥り、困窮してビーダーマン宅を訪ねるが一顧だに与えられず、ついにはガス自殺という形で命を絶つ。ビーダーマンのシュミッツに対する態度とクネヒトリングに対する態度は、それぞれの「無職」という共通の立場にもかかわらず明白な対照をなしているが、この対照こそ「ビーダーマンの特性Ⅰ」で述べたプライベートとビジネスにおける二面性をそのまま反映したものにはかならない。

コロスの歌にもう一度耳を傾けてみよう。

コロス 本当にたいへんだ、市民というものは！

つまりビジネスでは厳しく、
でもそれ以外では本当にいい人で、
良いことをしようと喜々として準備。

¹⁴ Vgl. Biedermann, Marianne: *Das politische Theater von Max Frisch*. Rheinfelden 1974, S. 17.

¹⁵ 「わたしは行商人ではありませんから」というセリフが放火魔であることのみならず、ビジネスの人間であることをも否定する意図を持つことは、続く「わたしは仕事を探しているわけではありませんから」というセリフが共通する先行発言「ビーダーマンさん、ご心配は無用です」を持つことから傍証される。(330) ビーダーマンのもうひとつの「心配」は、ビジネスにおける不利益であった。

シュミッツが「ビジネス」の人間か「それ以外」の人間かが確定した今、シュミッツに対してビーダーマンは、今後はもっぱら「本当にいい人」であり続ける。ここで注意したいのはその「いい人」ぶりが、とりわけある特定の方向性を持つことである。つまり「ビーダーマンの属性Ⅰ」で述べたように、ビーダーマンは自分自身を「富める者」として規定しているが、いっぽうでシュミッツは「無職」であり、したがって「貧しい者」であった。「富める者」として「貧しい者」に施しを行ない、いたわりや思いやりを忘れないこと——「いい人」ビーダーマンは自分自身が「いい人」であることを、主としてこの方法で確認・立証していくのである。

具体的に検証してみたい。「仕事を探しているわけではありませんから」という発言に続けてシュミッツは、「ここにやってきたのは、ただ外は雨が降っているからです」「このほうがあたたかいからです」と言う。これを聞いたビーダーマンは「お吸いになりますか?」と葉巻を差し出すのだが、この最初の（そして最初であるがゆえに重要な）「施し」の理由は、おそらくシュミッツの発言を「雨が降っても帰る自分の家がないのです」という意味に捉えたからであろう。つまり「無職」であることの貧しさに「家がない」ことの貧しさが加わって、「いい人」ビーダーマンは施しを始めざるをえず、そのことによってシュミッツが家に入り込んでいることを追認し、のみならず歓迎する意思を示したのである。そのあとで葉巻を吸いながら実際にシュミッツは、はっきりと「わたしはホームレスです」「わたしはホームレスです」と二度繰り返す。自分の推測が確認されたビーダーマンは、「パンはいかがですか?」「ワインはいかがですか?」とさらなる「施し」を始めることになった。(330f.)

ここでひとつの可能性が検証されねばならない。不審者シュミッツを家に上げ、葉巻やワインで饗応するまではともかくとして、そのあとで彼に帰ってもらう選択肢はなかったのだろうか? 行商人が入り込んで屋根裏部屋に居座るというお決まりの「手口」を、ビーダーマンは新聞などで読んで知っていたのである。シュミッツを屋根裏部屋に上げて泊めてしまうことが危険な行為であることを認識しながら、なぜそれを防ぎえなかったのだろうか? またもや理由は同じ——「富める者」として「貧しい者」に手を差し伸べるのが、ビーダーマンにとっては自分を承認し、肯定するために欠かせない行為であると思われたからである。そしてこの「欠かせなさ」をシュミッツは、ある巧妙な手段を用いて高めることに成功した。その手段こそ「人間」という概念である。

「行商人」がやってきたとき、彼が求めているものはビジネスではなく「Menschlichkeit」であるとお手伝いのアンナから伝え聞いて、ビーダーマンの態度が軟化したことをここで思い出したい。シュミッツは第1場の終わり近く、ビーダーマンによって屋根裏部屋に導かれるシーンの直前でふたたびこの「手段」を用いる。出された料理を味わいながら「ありえないことです、ああ、ありえないことです、こんなにこんなものがまだ残っていようとは!」とシュミッツはまず

「こんなもの」の価値を最大限に上げておいて、続くセリフで「こんなもの」の種明かしをする——それは「Menschlichkeit」であると。さらにシュミッツは畳みかけて、「こんな雨の日にわたしの様なものを通りに放り出してしまわないこと」、それこそが「わたしたちが必要とするものであり Menschlichkeit である」とこの言葉を続けて規定していく。続くビーダーマンのセリフ——「シュミッツさん、わたしを人でなし (Unmensch) などとは思わないでくださいよ」「というのもクネヒトリング夫人はそうだと言うもんですから」——はビーダーマンにとって「人間」概念がなにゆえにアキレス腱となったのか、そのいきさつを説明するものである。ビジネスの領域で従業員クネヒトリングになした仕打ち (解雇) を自分自身でも「人でなし」な行為であると認識しているがゆえに、プライベートの領域ではいっそう Menschlichkeit を求めざるをえないというからくりである。ここまで来れば屋根裏部屋までの距離に近い。シュミッツは続いて「ビーダーマンさん、もしあなたが人でなし (Unmensch) だったとしたならば、あなたは今晚わたしを泊めてくれないでしょうね、それは確かです」としてさらに「人間」を規定するが、これを聞いたビーダーマンにはもはや「シュミッツを泊めない」という選択肢は残っていなかった。妻が家に帰ってきたことをきっかけに、ビーダーマンはシュミッツをひそかに屋根裏部屋へと連れていく。「お越してください!……でも物音を立てずお願いします。わたしの妻は心臓が弱いもんですから」。(337)

ここまでで明らかになったのは、「ビーダーマンの特性 I」で示したプライベートにおけるビーダーマンの「実直でお人よし」の性質が、自分自身を「富める者」として位置付けたいうえで (ビーダーマンの属性 I)、とりわけ「貧しい者への施し」という形で発揮されることであり、またこの性質が Menschlichkeit という「決まり文句 (Phraseologie)」¹⁶ を媒介にして、シュミッツを屋根裏部屋にまで上げてしまったことである。¹⁷ 「富める者」として「貧しい者」に弱いこの

¹⁶ 『寓話とは何か?』(1976) (注 2 参照) という小文においてフリッシュは、ビーダーマンを「人道的なそしてキリスト教的な決まり文句 (Phraseologie) を弄するブルジョア」として位置付け、また『放火魔は誰なのか?』(1978) においても「彼 [ビーダーマン] がみずから陥った罠は、その決まり文句 (Phraseologie) である」と述べている。「Menschlichkeit」はこの Phraseologie の代表例であろう。もともと「Menschlichkeit」は最初はシュミッツによって用いられたが、決まり文句ゆえにビーダーマンは難なく自家筆中のものとした。その証拠に第 5 場でビーダーマンは、お手伝いのアンナに「必要なもの、それは Menschlichkeit だ、Brüderlichkeit (兄弟愛) だ」(371) と言っているが、この発言は明らかに先行するシュミッツの発言 (「ビーダーマンさん、わたしたちが必要なもの、それは Menschlichkeit です」(337)) の影響を受けている。Vgl. Frisch (1976) – Zit. nach: Schmitz, S. 70-74, hier S. 71; Frisch, Max: Wer sind die Brandstifter? In: *Schauspielhaus Zürich* (1977/1978), S. 33-35. – Zit. nach: Schmitz, S. 74f.

¹⁷ 「Menschlichkeit」あるいは「Unmensch」がなぜ決まり文句になりうるか、という点に関しては、一般に「人間は偉い」という価値観が浸透しているからであろうと思われる。この価値観はとりわけヨーロッパでは、おそらくほとんど淵源を求めることができないほど普遍的なものであろう。前注に記したフリッシュの「キリスト教的な決まり文句」に関係付けるならば、旧約聖書の創世記に次のようにある。「神は言われた。

特性を、ここで「ビーダーマンの特性Ⅱ」と名付けることにしたい。次章ではこの「特性Ⅱ」が最終的なカタストロフ、すなわち「放火」へとどのようにつながっていったかを検証していく。

2章 貧富の差はいかにして放火へとつながったのか——「友達作戦」とその失敗

第2場ではビーダーマンの妻、パヴェッテが二人目の放火魔・アイゼンリングを、ビーダーマンが留守のあいだに屋根裏部屋に上げてしまう。第3場でビーダーマンは、放火魔を追い出そうとしたり警察に通報したりしようと試みるが、結局のところいずれもその機会を逃してしまう。そこでビーダーマンは、第4場で作戦を変更することにした。放火魔2人を追放したり警察に訴えたりするのではなく、彼らを夕食に招くことによって、彼らと「友達」になってしまおうというのである。いわば「友達作戦」の開始である。¹⁸

ここではじめに「貧富の差」に関してのビーダーマンの見解を確認しておくことにしたい。本稿1章でも部分的に引用した場面であるが、第4場におけるアイゼンリングとビーダーマンのやり取りが参考になる。この場面でアイゼンリングは相棒シュミッツが「木屑」を取りに出かけたことを明かし、しかし帰りが遅いのであるいは警察にしょつ引かれたのではないかと話す。ここでビーダーマンは言う。「そんなふうにお話しなされると、いいですかアイゼンリングさん、わたしにはあなたが別の世界からやってきたように思われますよ。しょつ引かれる！魅惑的です。ね。別の世界から来たようにね！わたしどものまわりでは (In unseren Kreisen)、そうです、ほとんど誰もしょつ引かれたりしません……」(364) これを受けてアイゼンリングは答える。「なぜあなたたちのまわりで木屑を盗む人がいないかって、そりゃ明確ですよ、ビーダーマンさん、それが階級格差 (Klassenunterschied) なんですよ。」(364)

これを受けてビーダーマンは「ナンセンスです！」(364) と叫ぶ。「わたしは階級格差なんか信じません！(…) 率直に言って遺憾に思いますのは、下層階級の人に限って (gerade in den unteren Klassen) いまだに階級格差うんぬんなどと言っていることです。こんにちではわたしたちはみな、貧しい者も富める者も関係なく、同じ造物主からの被造物ではありませんか？ 中産階級もまたそうです。わたしたち、あなたとわたしは、肉と血からなる同じ人間じゃありませんか？(…) わたしは平等幻想に囚われているわけではありません、有能な人無能な人がいるのは当然のこと、ありがたいことにね、わたしたちはけれどなぜ、素直に互いに手を差し伸べよう

我々にかたどり、我々に似せて人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」神は御自分にかたどって人を創造された。」(『聖書 新共同訳 旧約聖書統編つき』日本聖書協会 1997年、2頁。)

¹⁸ 『ビーダーマン』で問題になっている友達関係は、結局のところビーダーマンからの一方的なものにすぎないことが判明するが、友達関係におけるこのような非対称性をフリッシュは、はやくも1932年の小品『友達とよそ者』*Freunde und Fremde*において扱っている。

としないのでしょうか？（…）そうすればみんなそれぞれの安心と平和を手に入れることができるのではないのでしょうか、貧しき者も富める者も、そう思いませんか？」（364f.）

「ナンセンスです！」「階級格差なんか信じません！」ビーダーマンはこう言いながら、「わたしどものまわりでは」と特定のグループへの所属を意識しつつ、「下層階級の人に限って」とあからさまに格差の存在を前提とした発言をしている。この錯綜したスタンスに表れているのは、ビーダーマンが実際のところは階級格差にこだわっていること、貧富の差を乗り越えたい壁として感じていることではないだろうか。このことを踏まえたうえで、ここではいったん第4場の冒頭に戻り、「友達作戦」の開始部分を検討することにした。

外出先から戻ってきたビーダーマンは、妻パベッテにガチョウ肉¹⁹を用意するよう言いつけ、それと同時にネクタイを外す。パベッテはビーダーマンに「なぜネクタイを外すの？」と尋ねるが、ビーダーマンはこれに直接的には答えずに、放火魔2人を訴えてしまうと恨みを買ってかえって放火されかねないこと、夕食に彼らを招いて「友達」になるほうが賢明であることを述べ、上着も脱いで放火魔が居ついてしまった屋根裏部屋へと上がっていく。ドアをノックして屋根裏部屋に入っていくときのビーダーマンの様子は、ト書きによれば次のようである。「ビーダーマン入室、上着を脱いで (hemdärmelig)、葉巻を手にとって」。(361)

ここで「ネクタイ」と「上着」を脱ぐことあるいは脱いだ状態であることに、ことさらに注意が向けられている理由はなんだろうか？ じつはこれが「貧富の差」に関係した問題であることを、わたしたちは第1場に戻って確認することができる。シュミッツがビーダーマンに向けて発する次のようなセリフに注目しよう。「われわれのようなものが敷居をまたぐや否や、そうネクタイをせず、ホームレスで、おなかを空かせて、という男が——彼らときたら、お座りください、と言っておきながら、こっそりと後ろで警察を呼ぶんです」。(334)

つまり「ネクタイをしていないこと」が「貧しい」ことと結びつけられることで、「ネクタイ」には富の象徴としての役割が（少なくとも相対的な意味において）与えられる。この役割をビーダーマンは認識し、重視しているがゆえに、放火魔と「友達」になるに当たってネクタイを外したのである。上着を脱いだ理由もこれと同じであろう。

「友達」になるためには、互いの貧富の差ができるだけ少ないこと、社会的格差が存在しないことが前提条件であることをビーダーマンは十分に認識していた。この前提条件を整えるためのビーダーマンの作戦は、第5場の冒頭で本人によって明確に指示されている。

¹⁹ Bänziger によるとガチョウ肉はマルクス主義では金持ちの象徴とされていて、ここでは搾取者ビーダーマンがそれを差し出さなければならないことが表現されているという。Vgl. Bänziger, S. 61. ネクタイを外す行為に対比されていると考えられるだろう。

ビーダーマン (….) 言ったはずだ。「簡素で心地よい夕食を」とな。このほかげた
燭台はどういうことなんだ!

アンナ でもいつも使っているじゃありませんか、ビーダーマンさん。

ビーダーマン 簡素で心地よくと言ってるだろ。ひねらかしちやだめだ!——それに
このフィンガーボール、ええい、いまいましい! このナイフ台、シルバー製だ、シ
ルバーとクリスタルばかりじゃないか。どんな印象を与えているんだ!
(370)

このほかにもふだんは使っている豪華な装飾品(高価な栓抜き、銀製のワインクーラー、ダマ
スク織のナプキン、テーブルクロス)を取り下げることや、アンナに給仕をさせず、家族の一員
として見られるように頭巾とエプロンを外してかわりに質素な身なりをさせるなど、富を示す指
標をできるだけ消していくようビーダーマンは指示する。この指示に込められた意図としては、
「放火魔たちがくつろげるように」²⁰ というのが最初に述べられる「理由」だが、「そもそもテ
ーブルクロスなどなんのために要るかわからない」²¹ と発言したあとでビーダーマンは、より
核心的な理由を叫ぶ。「階級格差をなくすように! (Nur keine Klassenunterschiede!)」(371)
と。日ごろ用いている豪華な装飾品を撤去し、給仕をなくして自分たちで食事を取り分けるよう
にすることで、つまり自分たちのほうから放火魔 2 人の経済状態へと降りていくことで、「友達
作戦」の前提条件である「貧富の差がない状態」を一時的に仮構しようと試みたのである。²²

ところがこの試みは第 6 場でもろくも崩されていく。できるだけ簡素な食卓のしつらえをした
うえで、食事とお酒だけは高級なものでもてなしたビーダーマンだが、乾杯の音頭を取ったあと
(「友情に乾杯 (Auf unsere Freundschaft.)」) (375) 食事がはじまってすぐ、アイゼンリング
の次のような発言をきっかけに「転落」は始まっていく。(下線強調執筆者)

アイゼンリング ガチョウにボマールワイン!——あと本当はテーブルクロスさえ
あればいいんですがね。

²⁰ S. 370. (『ビーダーマン』のテキストに該当部分はあるもののそのままの引用ではない場合は、今後注でこ
のように表記する。)

²¹ S. 370.

²² シュミッツは第 1 場で、お手伝いとしてのアンナを確実に見ている。また演出の仕方にもよるであろうが、
シュミッツもアイゼンリングも部屋から屋根裏部屋という順に入り込んできた以上、もともと備わっていた
豪華な食器、装飾品はすでに見てしまっているはずである。つまり第 5 場で食器を下げるのも、第 6 場でふ
たたび持ってくるのも、実際にはシンボリックな意味しか持っていない。ただしシンボリックであるから
こそ、より効果が強調されるという可能性もあるだろう。

バベツテ 聞いてる、ゴットリープ？

アイゼンリング 絶対にというわけじゃありませんよ——白いテーブルクロスですよ、ダマスク織りで銀製品が上に載ってるようなね。

(…)

ビーダーマン アンナ、すぐにテーブルクロスを持ってきたさい！ (375f)

前場の第5場でビーダーマンが命じて下げさせた豪華な食器類・装飾品の数々が、これ以降アイゼンリングの要望に従って、しかし最終的にはビーダーマンの命令によって次々に食卓にもたらされる。²³ つまりビーダーマンはみずから整えた「友達」の条件（富の平等）を、今度はみずから次々に手放していくことになる。第6場でビーダーマンがアンナに命じて持ってこさせた食器類・装飾品は以下の順である。テーブルクロス、フィンガーボール、ナプキン、ナイフ台。第5場で下げろと言われて下げたこれらのものを、今度はまた問答無用に持ってくるように言われ、しかもそれらが欠けていることをなかつた自分のせいにされたアンナは、「泣き出し、向きを変えてふいとお出て行ってしまった」。(377)

しばらくして戻ってきたアンナは、ある反抗のしるしを身にまとっていた。つまりお手伝いであることを象徴する頭巾とエプロンを着用していたのだが、これはまったく指示されていなかったことである。そしてこれら富のシンボルの掉尾を飾るのが飾り燭台であった。この飾り燭台によってビーダーマンと放火魔のあいだの貧富の差は最終的に確定するが、このときビーダーマンが飾り燭台に火をつけることは、おそらく象徴的な意味合いを持っている。貧富の差が確定して「友達」ではありえなくなったそのときに（「友達作戦」の失敗）、シュミッツとアイゼンリングは「敵」として確定し、そのことをみずから悟ったビーダーマンは、いわば来たるべき放火を先取りして燭台に火をつけたのであろう。

さきほどの「乾杯 (Auf unsere Freundschaft.）」(375) というセリフ以降に「友達 (Freund)」という言葉は本文中、最後のカタストロフまでのあいだにさらに6回出現するが、それらはすべてビーダーマンの発言である。しかもこれら6回のうち5回までもが、最終場面の2頁のあいだに集中している。²⁴ この段階では食卓は、すっかり豪華に整えなおされていた。つまりこの段階でのビーダーマンの Freunde! という言葉の連発（もっぱら相手への呼びかけとして使

²³ ここでシュミッツとアイゼンリングについて補足説明をしておきたい。シュミッツは単純に「貧しい人」としてビーダーマンの同情を引く立場だが、アイゼンリングはすこし違っている。「元ボーイ長」という職業に付与された、①豪華なブルジョアの生活を知っている ②しかし結局はブルジョアに「給仕」する立場である、というふたつの特徴によってアイゼンリングは、シュミッツとビーダーマンの仲立ちをしつつ周到にカタストロフへと導く狂言回しの役割を担っている。

²⁴ S. 385f.

われる)は、もはや「友達」関係が失敗してしまったことを悟った絶望感の裏返しであったはずである。

このようにして露わになり、確定したビーダーマンと放火魔 2 人の貧富の差は、²⁵ なぜビーダーマンが放火魔たちにマッチの火を渡してしまったのか、その理由をも説明する。そのからくりは第一には、ビーダーマンが放火魔たちに「あなたたちを放火魔とは思っていない。友達と思っている」²⁶ と言ったことの言質を取られる格好で、つまり友情の証としてマッチを差し出さざるを得なくなったということであるが、もうひとつはどんどん露わになっていく格差ゆえに、「こちらが向こうに施す」という一方的な関係に陥ってしまった、ということでもあるだろう。つまりビーダーマンにとっては友情とは、対等の関係においてはじめて成り立つものであり、対等であるならば「与え、かつ与えられる」つまりギブアンドテイクの関係が築かれるはずであるが、実際には装飾品が食卓に持ってこられたそのとき以降、両者間の「格差」は露見し、さらに拡大し、そのことによって放火魔たちにビーダーマンが一方的に与え、施す関係は確定的なものになってしまった。いわば渡してしまったマッチは最後の施しであって、最初に言われるがままにテーブルクロスを用意したことの延長線上に位置し、しかもその最終かつ必然の結果であったと解釈される。

3 章 教訓のない教訓劇——どこにもない自由

本稿は前章までで『ビーダーマンと放火魔たち』において、「貧富の差」がどのようなメカニズムでカタストロフを導いたのか、その必然性を検証してきた。本章ではここまでの議論を踏まえたうえで、『ビーダーマンと放火魔たち』がどのような意味で、副題として冠する「教訓のない教訓劇 (Lehrstück ohne Lehre)」であるのかを、引き続き「貧富の差」という観点から解き明かしてみたい。²⁷

²⁵ 第 6 場の役割を「富める者」と「貧しき者」との差をふたたび現前させるところに見る本稿の解釈は、「放火魔が最後の晩餐において豪華な装飾をみずから要求した」ことを「被支配者が支配者の依って立つ現存のシステムを燃やし去るために、そのシステムを現出させるため」と見る Müller-Salget の立場に近いと思われる。Vgl. Müller-Salget, Klaus: *Max Frisch*. Stuttgart 1996, S. 57.

²⁶ S. 385.

²⁷ 「教訓のない教訓劇」という副題をめぐる先行研究に関して、Springmann に集められているものをここで大まかに分類しておく。Vgl. Springmann, Ingo: *Erläuterungen und Dokumente. Max Frisch. Biedermann und die Brandstifter*. Revidierte Ausgabe. Stuttgart 1995, S. 54-64. ①「教訓劇」から教えを何も汲み取ろうとしないビーダーマン (あるいは読者・観衆) の「学習意欲」のなさ、変化を嫌う態度が示唆されているとするもの。(Nyssen; Küssel; Müller) ただしこのような態度を示唆することによってかえって観衆を扇動し、「教え」へと促しているとする解釈もある。(Karasek; Schenke) ②「教訓」は作者フリッシュが「教える」ものではなく、読者・観衆のひとりひとりが汲み取るべきであるとするフリッシュの「教育観」が表れているとするもの。(Galli; FL) ③「教訓劇」として作品があまりに一意的な解釈に固

そもそも『ビーダーマンと放火魔たち』がなんらかの意味で「教訓劇」であるとするならば、そこで示される「教訓」とは、まず第一に次のような問いに対する答えでなければならないだろう——「カタストロフ（放火）を防ぐ方法は本当になかったのか？ もしあったとすれば、それはどのようなものか？」

この問いに対してたとえば Max Bach / H.L. Bach は、『ビーダーマンと放火魔たち』がプラハでの共産主義者による政権乗っ取り事件をきっかけに書かれたことを示唆したうえで、「もしこの戯曲にモラルというものがあるとするならば、それはまさしく最初期の段階において全体主義〔ここでは共産主義を含む〕を根絶してしまう必要性である」と述べ、「ビーダーマンは招かれざる客の意図について疑惑を感じるや否や、すぐさま彼らを〔家から〕追放して警察を呼ぶべきだったのだ」とその「教訓」を明快な形で説く。「教訓 (lesson) はあまりに自明すぎて言及される必要すらないほどである」。²⁸

ところがビーダーマンは実際には彼らを追い出すことができなかったし、また次に同じことがあったとしても、「何も考えない権利」を主張しているビーダーマン²⁹ が彼らを追い出すことは不可能だろう、したがってこの演劇には「教訓がない」のだ、という論法であり、副題の説明としてはなんら不足のないものではある。そこでいったんはこの説明を受け入れたうえで、ここではさらに次のように問うてみたい——ビーダーマンはいったいなぜ、放火魔を追い出すことができなかったのだろうか？

ところで本稿の1章および2章は、じつはこの問いに対する回答の試みだった——ビーダーマンと放火魔のあいだに存在する「貧富の差」、これによって喚起されるビーダーマンのあわれみの情には、クネヒトリングとの一件という事情が背景にあった。ビーダーマンの所与の性質とそこに現れた「貧しい」放火魔というお膳立てが、いやが応にもカタストロフへと導いてゆくその必然性に鑑みて、わたしたちは Bach のような解決法ではなく、何か別の教訓を模索せねばなるまい。ビーダーマンという個人に責任を委ねること、すべてを意志の問題に帰してしまうことは、社会が無数のビーダーマンを抱えるとき、「カタストロフの回避」という観点からはほとんど効

定されることをフリッシュが嫌った結果であるとするもの。(Rischbieter) ④ブレヒトの「教訓劇」からの差異化をはかった結果であるとするもの。(Petersen 他) ただしこの「差異化」の結果として、フリッシュがブレヒトに比して優れていると評する論者 (Mann; Jacobs) と劣っていると評する論者 (Franzen; Kesting) とに分かれる。いっぽう「教訓」の具体的な内容に関してはほとんど言及されていないものの、「放火魔」を共産主義者やナチスに見立てたり (Bach; Karasek; Schenke)、あるいは天井裏に置かれた火薬樽を「原子爆弾」に見立てたりするなど (Jurgensen)、論者によっては舞台上の「危機」を具体的な社会的な状況で想定している。

²⁸ Bach, Max / Bach, H.L.: The Moral Problem of Political Responsibility: Brecht, Frisch, Sartre. In: *Books abroad* 37 (1963) H. 4, S. 378-384, hier S. 381.

²⁹ S. 357.

果を持たないだろう。なにしろ「だれもがビーダーマン！（JEDERMANN BIEDERMANN!）」（381f.）でありうるのだ。

それでは残された別の道として、個人にではなく、社会構造そのものに責任の所在を求めればどうなるだろうか。³⁰ 前章までの考察によれば、そもそも「貧富の差」こそがすべての発端だった。そこでもっとも単純かつ根本的な発想をすれば、次のような解決策が浮かび上がる。すなわちこの発端をなくしてしまうことである。

発端すなわち「貧富の差」をなくすこと、それは決して社会の特定の成員同士の問題ではない。ビーダーマンと放火魔シュミッツのあいだにたまたま貧富の差がなかったとしても、それはカタストロフの阻止にいささかも寄与しなかっただろうことを、わたしたちは第6場の最終場面で確認することができる。シュミッツとアイゼンリングがいとまごいをする直前、お手伝いのアンナが部屋にコーヒーを運んでくるが、なぜか彼女はひどくうろたえていた。バベッテにわけを聞かれたアンナが答えて言うには、「うしろのほうで——空が、奥さま、キッチンから見たら——空が燃えているんです……」（387）ここで放火魔たちはお辞儀をしいとまごいをするが、この時点ですでに空は真っ赤に燃えあがっていた。ビーダーマンは蒼白になりながらも次のように言う。

「幸いわたしたちのところではない……幸いわたしたちのところではない……幸い——」（387）

ところが結末が示すように、それはわたしたちのところでもあったのである。複数の放火魔たちによって、複数のビーダーマンたちのところで、放火は同時多発的に行なわれたのであった。なにしろ「だれもがビーダーマン」でありうるのだ。ビーダーマンはどこにでもいるし、放火魔はどこにでも潜んでいる。カタストロフはいつでもどこでも起こりうるのであって、毛生え葉業の社長・ビーダーマンと元レスラー・シュミッツに限定された問題では決してない。

このように考えると発端すなわち「貧富の差」をなくそうとする試みは、決して個人的努力や限定された集団の働きかけによって成功するものではない。特定の人々ではなく、社会を構成する任意の複数人を抽出した際に、それぞれのあいだに経済格差が見られないような状態は、社会全体の変革によってはじめて実現可能である。このときに選択肢として浮かび上がるのが、私有財産を否定し、貧富の差のない社会という理想を掲げた共産主義、あるいは社会主義のイデオロギーである。

共産主義はそもそも『ビーダーマンと放火魔たち』の成立に強い影響を与えている。1948年

³⁰ なお責任の所在をビーダーマン個人にではなく社会に求める研究は、本稿のほかにもすでに存在する。たとえばJurgensenは次のように述べている。「ビーダーマンのクネヒトリングに対する容赦ない仕打ちは、頽落した市民層の忌まわしき遺物として理解されなければならない。（…）ここでは社会秩序そのものが犯罪的であることが明かされている。」Vgl. Jurgensen, Manfred: *Max Frisch. Die Dramen*. Bern 1976, S. 66-79, hier S. 79. ほかにBiedermann (1974)など。

の1月、チェコスロバキアのプラハに滞在したフリッシュは、『日記 1946-1949』*Tagebuch 1946-1949* (1950)³¹ で当時のきな臭い雰囲気を次のように伝えている。「状況は非常に切迫している。彼ら〔おそらくゴットワルトを首班とする共産党勢力ならびにベネシュ大統領のことを指す〕は個人的な友情の最後の橋の上でいまだに争っている。もはや昔のオープンな議論はほとんど不可能だろう」。(Tb: 552f.) そしてついに同年2月、チェコスロバキアに政変が勃発し、もともと東西両陣営に対して中立的な立場を取っていた同国に共産党支配体制が確立された。この件に関してフリッシュは次のように記す。「チェコスロバキアの政変。すべてがあつという間だった。砂上の楼閣が崩れ落ちるときには、いつでもそうであるように」。(Tb: 555) この記述のすぐあとに配されるのが、「ビーダーマン・コンプレックス」のいちばん最初の作品である『バーレスク』*Burleske* という小品である。³²

このような成立史を考慮してだろう、『ビーダーマンと放火魔たち』の「放火魔」を共産主義者とみなし、放火行為を彼らによる体制転覆であるとする見方は、長いあいだ『ビーダーマン』解釈の主流であった。³³ あまりに固定的な解釈を嫌ったのか、もうひとつの主流であった放火魔をナチスと見る解釈³⁴ とあわせて、フリッシュは1976年に『寓話とは何か?』(本稿既出)と題する寄稿文で次のように反論する。

『『ビーダーマンと放火魔たち』にあとから付け加えた『Nachspiel』(幕切れ後の小劇)がナチスと結びつけて解釈されたので]のちになって『Nachspiel』をわたしはふたたび取り消した。なぜならば『Nachspiel』によって寓話が〔特定の〕過去に結びつけられ、結果として作品をそのように固定してしまったからである。

しかしながらこの作品は寓話なのである。³⁵

さらにフリッシュはこの寄稿文を「上演されるその時・その場所の差し迫った諸問題と衝突す

³¹ 以下『日記』と略称する。ただしこの『日記』は通常の日記とは異なり、多くのフィクションを含んだ一種の文学作品である。

³² ここに記した『バーレスク』(1948)に端を発する一連の関連した作品群はまとめて「ビーダーマン・コンプレックス」と呼ばれる。『バーレスク』に続いて1949年の夏にフリッシュは、ラジオ・チューリヒからの依頼を受けて『放火魔たち』*Die Brandstifter*と題するラジオ劇用の草稿を執筆。ただしこの企画はこの段階ではこれ以上進められることなく、1952年になってバイエルン放送からの依頼で『ビーダーマン氏と放火魔たち』*Herr Biedermann und die Brandstifter*が執筆され、1953年に放送された。続いて1958年の『ビーダーマン』、同年には『幕切れ後の小劇』*Nachspiel*が追加される。ほかにもテレビドラマ版ビーダーマン(1958; 1963; 1967)がある。

³³ Vgl. Hage, S. 85f.

³⁴ Ebd.

³⁵ Frisch (1976), S. 10.

ることによって、寓話をはじめてその意味を受け取るのだ」³⁶と結び、『ビーダーマン』が寓話であり続けるためにこれを特定の時代や事件に固定させてしまわないこと、つまりできるだけ「一般性」を持たせようとしていることを明らかにする。³⁷

実際にはこのような「反論」に恃むまでもなく、フリッシュは作中に真面目なインテリかつ第三の放火魔である Dr. phil. (文学・哲学博士) という人物を登場させることによって、この作品が特定の歴史や集団に還元されることを周到に回避したはずであった。たとえば第 6 場で Dr. phil. はつぎのように告白する。

Dr. phil. (…) そうなんです、ビーダーマンさん、わたしは世界の改良を志していました、まじめで真剣でした、全部知ってはいたんですよ、彼ら〔シュミッツとアイゼンリング〕が屋根裏部屋で何をしていたかってことはね、全部ね、ただひとつのことだけは知らなかったんです——彼らはそれを純粋な楽しみのために (aus purer Lust) していたんです！ (388)

Dr. phil. が第 4 場ではじめて登場したとき、アイゼンリングは彼のことを次のように評している。「あんたたちときたらいつもそんなふうになイデオロギーでかちかちなんだ、いつもそんなふうにな真面目なんだ、ほとんど背信行為と言っていらいにこね——だってそこには本当の楽しみなんかありやしないんだから」。(368)

つまり Dr. phil. を一種の理想主義者、真面目なイデオロギストとして設定し、シュミッツとアイゼンリングを Dr. phil. と対置させることによって、放火というテロ行為がじつはまったくイデオロギー的なものではなかったこと、純粋に愉快犯的なものであったことを強調しようとしたのである。

フリッシュ自身も 1978 年、初演から 20 年後にチューリヒ劇場で『ビーダーマン』がふた

³⁶ Ebd.

³⁷ それでも実際にはフリッシュは、本稿「はじめに」でも触れたように、寓話が否定なく一定の意味を付与され、それに固定されてしまう運命を認識していた。1967 年にフリッシュは次のように書いている。(一部「はじめに」で引用した部分を含む)「意味の演劇——対象とされる現実が舞台上で模倣されるのではなく、演劇が生み出す「意味」によってのみ、その現実がわたしたちの意識に届くのである。舞台上の場面そのものは明らかに非・歴史的に提示される、例示として作り込まれて、モデルとしてつまり人工の素材から作られている。(…) それはよい。ただひとつ欠点がある——寓話 (Parabel) は意味を酷使してしまう、そのために演劇は、以上で証明終わりということになりがちである。『教訓のない教訓劇』という副題によって抗議しようとも、それはほとんど助けにならない。寓話 (Parabel) はどうしても教訓を含意してしまうのだ——たとえわたしにとっては教訓が問題でないにしても、そしてひょっとしたら今までにそれが一番の問題だったことは一度もなかったとしても。だから寓話 (Parabel) は不快なのだ。だからほかの方法を探すのである。」(Iz: 477)

び上演されることになったことをきっかけに、『放火魔は誰なのか?』（本稿既出。注 16 参照）と題して次のように書いている。

2 人の放火魔たちはいったい何者なのか、この質問をわたしは 20 年来、少なくとも千人以上の生徒たちから受けてきた。ゴットリーブ・ビーダーマンはブルジョアである、これは明らかだ。しかし 2 人の放火魔たちは、いったいどんな党派に属しているのだろうか?——社会を変革したいなどとは彼らは一言も言っていない。つまり革命家ではないのだ、世界の改良を志してはいないのである。彼らが火事を起こすのは、ただ純粋な楽しみからである。放火マニアというわけである。彼らの活動は非・政治的なのである。³⁸

このようなフリッシュの見解を受けてのことだろう、2002 年に Heribert Kuhn は「全体主義研究の終焉」と題して、それまでの『ビーダーマン』受容を次のように批判している。

とりわけ数十年このかたこの〔全体主義という〕概念が隆盛だったために、フリッシュの意図に反して『ビーダーマン』は左右両方面の全体主義に反対する「教訓劇」ということになってしまった。この作品の提示するメタファーから政治的な言説を取り除くことはもはやできなくなっている。なんらかのかたちで民主主義的な基準から逸脱するような展開はすべて、潜在的な「放火魔たち」が活動していると名指されて疑いの目で見られ、モラル化されてしまうのである。つまり『ビーダーマン』はある意味で、保証付きの受容というものの犠牲になってしまった。³⁹

Kuhn はここで「全体主義」そのものの研究が挫折してしまった現状についても言及し、「全体主義」概念がもはや有効な共通の指標を提供しえないことを指摘して、今後の『ビーダーマン』研究が別の方向性で模索される必要性を説いている。

続いて本稿がこれより先、結論部分までどのような道筋をたどって論を進めていくのか、ここであらかじめ概観しておくことにしたい。まずは『ビーダーマン』を「全体主義」（本稿においては特に「共産主義」）という政治的枠組みから解き放つべし、という Kuhn の主張に対して、本稿はこの枠組みが実際には必然的なものであることを示したい。つまり「共産主義」（ならば

³⁸ Frisch (1977/1978). – Zit. nach: Schmitz, S. 74f., hier S. 75.

³⁹ Kuhn, Heribert: Das Ende der Totalitarismus-Forschung. In: Frisch, Max: *Biedermann und die Brandstifter. Mit einem Kommentar von Heribert Kuhn*. Frankfurt a. M. 2002, S. 125f.

にそれと対置される「資本主義」という政治的枠組みに基づく解釈を擁護する立場だが、この立場の妥当性を『ビーダーマン』のテキストおよびフリッシュのその他のテキストによって説明していく。(3.1.) 続いて「共産主義」と「資本主義」それぞれのイデオロギーに対するフリッシュの立場を、『ビーダーマン』以外のフリッシュのテキスト・発言から検証するが、その際に中心とされるのが自由の問題である。(3.2.) 最後に Kuhn のもうひとつの主張である「全体主義(共産主義)」に抵抗する作品であるとする解釈から距離を取るという立場に対して、本稿はこちらには賛成の立場を表明するが、なぜ賛成であるかを説明することが、そのまま『ビーダーマンと放火魔たち』が「教訓なき教訓劇」である所以を説明することになるだろう。(3.3.)

3.1. 『ビーダーマンと放火魔たち』における「資本主義」「共産主義」という枠組みの妥当性について

ここでは最初の確認事項として、『ビーダーマンと放火魔たち』で設定されている社会が典型的な資本主義社会であり、ビーダーマンが資本家階級に属するブルジョアであることを、テキストの内容から読み取ることにはしたい。まずはビーダーマンが毛生え菓製造業を営んでいて、従業員クネヒトリングを自分の裁量で解雇していることに注目する。これは資本主義社会の特徴である「私企業による生産」を意味している。⁴⁰ 次に私有財産制度の存在である。たとえばビーダーマンは次のような発言をする——「言っておきますけどね、とにかくにもわたしはこの家の所有者 (der Hauseigentümer) なんですよ！」(357) さらにこの発言に続いてコロスが次のように歌っている。

われわれにとって神聖なものが神聖であらんことを、

⁴⁰ 寓話がモデルとして作られるというフリッシュの意図(注 37 参照)に沿い、ここではまずモデルとしての資本主義の特徴を Brockhaus の百科事典から挙げておく。①生産手段の私的所有 ②利潤の最大化 ③市場経済④生産と消費の計画は需要と供給のバランスによって決定される価格によって決まる。⑤市場が経済活動を決定し、競争原理が刺激要素であり制御要素である。⑥国家が法秩序をもって経済活動の枠づくりに努める。さらに同じ Brockhaus の「マルクス主義理論としての資本主義」からやや長めに引く。おそらく『ビーダーマン』の世界で想定されているのは、主としてこちらの資本主義ということになるだろう。「マルクスは自分で発展させた『史的唯物論』の教えのなかで、資本主義を『利潤追求を目的とした私的所有のシステム』として分析している。彼にとっては資本主義は『歴史的に最後の搾取社会』であり、この社会ではブルジョアが搾取する側の、プロレタリアが搾取される側の階級として『対立する』(つまり和解できない)矛盾として相対している。生産手段を独占的に所有するブルジョアは、社会的生産の大半を不当に我がものとし、労働者階級に不利益を与える。生産物の社会的な性質と生産物の大半を不当に私有することの根本的矛盾は社会的緊張を誘発し、階級闘争となって噴出して、プロレタリア革命と生産手段所有の公共化という流れのなかで、資本主義の廃止と社会主義社会の建設へと導いていく。」Vgl. Art. „Kapitalismus“. In: *Brockhaus-Enzyklopädie in 24 Bänden*. 19., völlig neubearb. Aufl. Bd. 11. Mannheim 1990, S. 438f.

〔それは〕私有財産 (Eigentum)、
それからどんなものが生じるにせよ、
いったん消しようのないもの〔火〕が生まれてしまったら、
われわれはみな丸焦げになってしまう。
われわれにとって神聖なものが神聖であらんことを！ (358)

ここで示唆されているのは、市民が財産を私有していて、それが神聖なものであること、つまり社会として私有財産に至高の価値が置かれていることである。

またすでに引用したコロスの発言——「本当にたいへんだ、市民 (Bürger) というものは！／つまりビジネスでは厳しく、／でもそれ以外では本当にいい人で」——に関しても、市場における自由競争のためにビジネスの厳しさが問われるのだとすれば、資本主義社会の重要な特質を反映しているものと考えられるし、ここに見られる「市民」という表現も、あるいは「プロレタリア (労働者)」に対する「ブルジョア (資本家)」の意味で使われているのかもしれない。さらに1章でも触れたビーダーマン宅の居間にある豪華な食器・調度品の数々も、獲得された私利私欲で購われたものと考ええるならば、資本を投入して獲得した利益が資本家階級の豊富な私有財産を形成していく資本主義社会の一側面を伝えている。

以上のように『ビーダーマン』の世界は典型的な資本主義社会の特徴を示しているが、実際にフリッシュ自身もこのことは認めていて、たとえば既出の『放火魔は誰なのか』のなかで、ビーダーマンのことを次のように形容している——「ゴットリープ・ビーダーマンはブルジョアである、それは明らかである」。⁴¹ つまり「資本主義」「共産主義」という枠組みのうち、前者の枠組みに関してはテキストの示すところでもあり、また作者が認めているところでもあって、とくに問題にする余地はないと思われる。

問題は後者の枠組みである。フリッシュは「現存の社会」つまり資本主義社会に火を放つシュミッツとアイゼンリングを、「純粋な楽しみ」を動機とする「放火マニア」と位置付けることによって、彼らのイデオロギー性を否定することに成功した。したがって彼らは共産主義者ではない。ところがフリッシュはここで、彼らのイデオロギー性を否定したいがために、あるイデオロギー信奉者を引き合いに出すという手段に訴えてしまった。それがつまり Dr. phil. というインテリである。彼を引き合いに出した理由としては、おそらくイデオロギー信奉者に2人の放火魔のイデオロギー性を否定させることによってこの否定の妥当性を担保し、シュミッツとアイゼンリングの非・政治性を強調しようとしたためであろう。ところがこの目論見は返す刀で、Dr. phil.

⁴¹ Frisch (1977/1978). – Zit. nach: Schmitz, S. 74f., hier S. 75.

のイデオロギー性を強調することにつながってしまう。Dr. phil. は決して人畜無害な人物ではない。少なくとも途中までは世界の改良を夢見て、シュミッツとアイゼンリングの片棒を担いでいた紛れもないテロリストである。シュミッツとアイゼンリングをイデオロギーなきテロリストであると非難することによって、イデオロギーに基づいた自身のテロリズムの一種の正当性を主張しているのだ。つまりフリッシュはテロリスト3人のうち2人の非・政治性を示したいがために、残りの1人の政治性を浮き彫りにしてしまったのである。もしフリッシュが Dr. phil. を含めたテロリスト（放火魔）グループを総体として非・政治化したいのであれば、「純粋な楽しみから（aus purer Lust）」(388) という発言を Dr. phil. ではなく、コロスに任せてしまうべきであった。

それでは Dr. phil. の信奉するイデオロギーとはどのようなものか？ Dr. phil. がどのような社会を敵視しているかを考えれば、それはおのずと明らかになるだろう。彼がたとえばキリスト教社会を敵視する反キリスト教勢力であるとは考えられない。なにしろゴットリーブ（神に愛された）という名を持つビーダーマンの信仰はほとんど形骸化しているのだ。またビーダーマンからかつてなんらかの仕打ちを受け、個人的な怨恨を抱えているわけでもない。少なくともそのような記述はないし、このような怨恨を「理念（Idee）」(369)「イデオロギー」とは呼ばないであろう。「資本主義」社会であることこそ、上で詳しく見てきたように、ビーダーマンの住む社会の本質的な特徴である。この本質を破壊しようと試みるテロリスト Dr. phil. のイデオロギーとは、やはり共産主義であると考えるのがいちばん自然ではないだろうか。

『ビーダーマン』テキストの外部からの裏付けも可能である。次節で詳しく扱う『日記』の1947年「ブラハ」の記述に、共産主義の理想を掲げる友達が「場合によっては暴力を使っても変革を成し遂げる用意がある」（Tb: 487）と言ったことに対して、フリッシュは次のような疑問を抱く——「手段を正当化するような目的などあるのだろうか？（Gibt es einen Zweck, – der unsere Mittel heiligen kann?）」この疑問は『ビーダーマンと放火魔たち』において Dr. phil. を形容するコロスの次のような言葉と符合している。「眼鏡をかけた彼 [Dr. phil.] / (….) どんな行為にも決然として当たる／というのも目的が手段を正当化するからだ（そう彼は望んでいる）(Einer mit Brille / [...] entschlossen zu jedweder Tat, / nämlich es heiligt die Mittel (so hofft er) der Zweck, [...])」(369) このことによって Dr. phil. は意識的にせよ無意識的にせよ、フリッシュによって共産主義者として設定されていると考えられよう。共産主義がしばしば暴力革命と結びつきやすいことを、10年の時を隔ててフリッシュはなお警戒していたのではないだろうか。⁴²

⁴² フリッシュの暴力に対する徹底的な嫌悪感や、第二次大戦後すぐに書かれた戯曲『ほらまた歌っている』における登場人物の一人、エドゥアルトの次のようなセリフに端的に表れている。「ぼくは暴力を信じない、絶対に、たとえそれをいつか僕らが手に入れようとも。悪魔を滅ぼすことができるような暴力などありはし

つまりシュミッツとアイゼンリングは非・政治的であるにしても、もうひとりのテロリスト Dr. phil. は政治的であって、放火魔グループは全体として見た場合には、イデオロギストつまり共産主義者としての性質が介入していることは否定できない。つまり『ビーダーマンと放火魔たち』を資本主義対共産主義の対立として見ることは構図として自然である。この構図はたしかにフリッシュの本意ではなかったかもしれないが、このことで作品の価値が貶められることはない。なぜならむしろここで提示された放火魔たち（シュミッツ、アイゼンリング、Dr. phil.）の混合的性質にこそ、見過ごされがちなテロリズムの本質が存在するように思われるからである。政治的・宗教的な原理主義に基づくテロリズムが頻発する昨今、わたしたちは彼らテロリストたちのうちに潜む、純粋にイデオロギー的な動機以外のもの、いわばカタルシスへの欲求といったものをも考慮に入れる必要があるだろう。テロリストは一人であれ集団であれ、基本的には Dr. phil. のような真面目なイデオロギストであるにしても、他方ではシュミッツとアイゼンリングに見られるように、どこかで純粋な破壊の喜びをも求めているのではないだろうか。

3.2. フリッシュにとつての「資本主義」と「共産主義」——自由の概念を手がかりに

この節ではいったん『ビーダーマン』のテキストおよびコンテキストから離れ、フリッシュにとって「資本主義」ならびに「共産主義」がそれぞれどのような意味を持っていたのかを、主として『日記』やフリッシュの政治的な発言から探してみたい。

1975 年、フリッシュは Heinz Ludwig Arnold との対話で、1947 年にブレヒトとはじめて会ったときのことを回想している。ブレヒトがフリッシュの師匠になるほど忍耐強くはなかったこと、またフリッシュもブレヒトに対する抵抗を覚えていたことから、そのときにはブレヒトとフリッシュのあいだでは、それほど政治的な議論にはならなかったとしている。ただ会話の内容は別にして、この Arnold との対話でフリッシュは、1947 年当時の自分の政治的態度を次のように表明している。「その当時わたしは——政治的に言えば——ヒューマニスティックな、いくぶんゆるい感じの社会主義者だった」。⁴³

ここで問題になるのは「社会主義」と「共産主義」のニュアンスの違いである。そもそもマルクス・レーニン主義においては社会主義は共産主義へと移行する過渡期の段階に位置付けられ、生産手段の共有は見られるものの、なおも一定の社会的不平等の残存する状態を意味した。つまりこの意味における「社会主義」は、前方にあくまで「共産主義」を見据えたものであり、基本的にはほとんど共産主義と同義で用いられるものであった。⁴⁴ さらにレーニンがロシア革命に成

ないんだ。」「なぜだい?」「暴力のあるところ、そこにはいつも、悪魔もまたいるからだよ」(Ns: 99)

⁴³ Arnold, S. 31.

⁴⁴ Vgl. Schieder, Wolfgang: Art. „Kommunismus“. In: *Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon*

功する 1917 年以前においては、これら共産主義的あるいは社会主義的な運動は、その多くが「社会民主主義」の名のもとに行なわれてきたのである。ところがレーニンがこの名称を忌避し、代わりに「共産主義」の採用を宣言して以来、「社会民主主義」はマルクス・レーニン主義とは一線を画した独自の路線を歩みはじめる。つまり社会主義の穏健派を標榜し、共産主義がしばしば暴力革命や一党独裁に傾きがちなことからこれに距離を取りつつ、修正主義的・民主的な方法で平等な社会を作りあげようと試みたのである。⁴⁵ たとえば 1951 年のフランクフルト宣言は、当時の民主的社会主義の国際的な綱領を示すものであったが、ここでは資本主義社会の弊害が指摘されるいっぽうで、共産主義もまた次のように厳しく批判されている。「社会主義者は、資本主義の下で人間を分断している搾取を取り除くことによって自由と正義を獲得しようと努めている。これに対し共産主義者は、ただ一党独裁を確立するためだけにそれらの階級分断を先鋭化しようとしている。」⁴⁶

これらふたつの「社会主義」のうち、1947 年当時のフリッシュの政治的立場は「民主的社会主義」のほうであったと考えられる。つまり「社会主義」という概念の持ちうる急進的なニュアンスを、「ヒューマニスティックな、いくぶんゆるい感じの」という形容詞で和らげることで、暴力革命や一党独裁を忌避する方向を示唆したのである。この意味では形容詞の付かない「社会主義」は、フリッシュにとってはほとんど「共産主義」と同義であったと考えられよう。フリッシュのこの政治的方向性は後年まで変わらなかった。たとえば Arnold との対話でフリッシュは、1975 年現在の政治的態度について、「もし〔政治的立場を〕尋ねられたなら」と前置きをしたうえで、「社会主義者です、もっとも補足するなら、民主的社会主義の方向ですが」⁴⁷ と明かしている。

フリッシュ流のこのいわば「括弧付きの社会主義」は、『日記』のなかでチェコスロバキアの政変を記述した箇所にも記されている。フリッシュはこの政変に少なからぬショックを受けて『バーレスク』を書いたが、それがなにゆえのショックだったかといえば、チェコスロバキアという国家に政変前まで彼は、一種の理想的な政治を見ていたからであった。「チェコスロバキアの政変。すべてがあつという間だった。砂上の楼閣が崩れ落ちるときには、いつでもそうであるように。友人たちが気遣わしい。加えて知人たちはわたしのことをいい気味だと思っている、というのもわたしは、チェコスロバキアのことをいつも、社会主義的民主主義の好例だと紹介して

zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland. Bd. 3. Hrsg. v. Otto Brunner, Werner Conze, Reinhart Koselleck. Stuttgart 1972, S. 455-529, S. 515ff.

⁴⁵ Vgl. Art. „Sozialismus“. In: *Brockhaus Enzyklopädie*. Bd. 20., Mannheim 1993, S. 542f.

⁴⁶ <http://homepage2.nifty.com/socialist-consort/SDforeign/Sl/Frankfurt/FrankfurtDeclJ.html> [Zugang 15. Dez. 2012]

⁴⁷ Arnold, S. 55.

いたからだった。」(Tb: 555)

このような「括弧付きの社会主義」というフリッシュの政治姿勢は、前節でも引用した『日記』中の「プラハ」(1947年)の記述(Tb: 487-490)を参照すればより明確な意味が浮かび上がる。ここでフリッシュは資本主義と共産主義のそれぞれについて「自由」という観点から批判を加えている。この部分に関してはJulia Tkachenkoの2011年の博士論文が適切な要約をしているので、そのまま論文を引用したい。

フリッシュは資本主義社会に対しては経済秩序を批判し、共産主義社会に対しては思考の自由を認めないイデオロギーを批判する。資本主義の、フリッシュの言葉を借りれば「支配的な」経済秩序は、貧しい人々の尊厳をふたつの点で傷つけてしまう。ひとつには彼らが豊かな人々のように、いい食べ物、いい服、いい靴を手に入れることができないということ、もうひとつには職業選択において制限されてしまうということである。(…)

共産主義ないしは社会主義というものは多くの人々に自由選択の余地を与えない、というのもそれはフリッシュの見方によると、ただ暴力を通してのみ幅を利かせる圧政(Tyrannie)であるからだ。⁴⁸

フリッシュによれば人間にとっていちばん大切なものは「尊厳(Würde)」である。(Tb: 487-490)そしてこの「尊厳」は、端的に選択の自由という形で現れる。選択の自由があつてこそその責任であり、ここが動物と人間とのいちばん大きな差であると彼は考えていた。ところが資本主義も共産主義もこの「自由」を奪う制度であるという。資本主義においては貧しい人々が衣食住⁴⁹ならびに職業選択の自由を奪われてしまう。共産主義においては思考の自由ならびに表現の自由を奪われてしまう。両方ともに「自由」がない体制であるため、人間の尊厳が損なわれてしまうのである。

このように資本主義および共産主義それぞれの欠点を、共通して「自由」の欠如という観点から捉えているフリッシュだが、ここでとくに資本主義における「自由」の欠如とはフリッシュにとってどのようなものであったのか、もうすこし掘り下げつつ別の指標でとらえ直すことを試み

⁴⁸ Tkachenko, Julia: *Religiöse Gehalte im Werk von Max Frisch*. Phil. Diss. Freie Universität Berlin 2011, S. 107.

⁴⁹ たとえば食べ物の自由が奪われることは、単に好きなものが食べられないということではない。飢えとそれによる思考の不自由が問題にされているのである。「飢えている者は選択ができない。彼の精神は欲するところから来ているのではなく、飢えから来ているのである。(Der Hungernde hat keine Wahl. Sein Geist kommt nicht, woher er will, sondern er kommt aus dem Hunger.)」(Tb: 488)

たい。まずはこの『日記』中の「ブラハ」の記述において、なぜ「われわれ」（フリッシュとその友人たち）が資本主義経済体制を否定するのか、その理由が次のように説明される。「それは一人の人間に、人間のあるグループに、あるいは全人間の大多数にまったく選択の余地を与えないからである」（Tb: 488）。たとえば職業の選択に関してもこれはあてはまる。労働者の息子は労働者にならざるを得ない。なぜならほかの職業に挑戦できるような経済的余裕がないからである。「彼は彼がなりうるものになることができず、また自分が何になりうるのかを知ることとは決していない。ひょっとしたら本当に彼は、ほかのものになることはできないのかもしれない。しかし実際に試してみる前に、どうしてそれを決めることなどできよう？ ほかの人々（Andere）はなりうるものになることができる、時にはそれ以上のものに——なぜなら何百万人という生が無駄に費やされるので、能力ある人間はほんのひと握りということになるからだ」（Tb: 489）。

この記述は次のようなことを示唆していると思われる。つまりフリッシュは「貧しさ」を選択の自由を奪う元凶として位置付けているが、資本主義社会におけるこの「貧しさ」は、貧しい人々みずからの所産というよりも、むしろ富裕層の搾取が原因である。「何百万人という生」を一部の富裕層（「ほんのひと握り」）が食いものにしているために、前者はいつまでも貧しいままにとどまり、かつなりうるものにすらなりえないのに対し、後者はなりうる以上のものになって富を再生産していく。

このようなからくりで生み出された、理不尽な「貧しさ」と「富」に向けられたフリッシュの怒りは、「なんじ盗むなかれ」という十戒以来のモラルをラディカルな形で塗り替えてしまった。『日記』に収められた最後の物語『スケッチ』*Skizze*の主人公、高名な弁護士のシンツ Schinz は、ある日ふらりと森に散歩に出かけたが、そこで道に迷って困っていたところ、とある森林官に出会って、町へと戻る道を教えてもらう。だがシンツは引き返すことなく、そのまま森林官と一緒に森を先へと進むことに決め、二人は道すがらとぎれとぎれに会話を交わすのだった。弁護士という自分の職業を明かしたシンツは、森林官から「とある事件」（Tb: 727）のことを聞かされる。ところが森林官の語り口は回りくどく、職掌からシンツは余計な情報をそぎ落とそうとして、「要するにその男は〔自転車を〕盗んだということですよ」と聞く。ところが森林官は、「男は盗んでいない」と言うのである。「その男ははなはだ困窮していたのです、というのもある日——」という森林官に、シンツは「だから盗んだということですよ」と聞くと「違う」と言う。「でもそうおっしゃいましたよね」と追及するシンツに森林官は、ふたたび「違う」と否定し、「言っているじゃありませんか、その男ははなはだ困窮していたのです、というのもある日——」このあと森から家へと帰ったシンツは、妻のビルマに次のように叫ぶ。「嘘をついていた、そう、嘘をついていたよ！ ぼくは生涯ずっと嘘をついていたんだ。」（Tb: 730）森林官はのちにじつはキリストであることが判明する。

森林官との邂逅はシンツの人生を変えてしまった。3日後に法廷で弁護士シンツは、ある窃盗事件、今度は自転車ではなくシトロエン（車）を盗んだ男の一件に携わる。シンツは次のように「犯人」を弁護して、まわりから「入院が必要である」と診断され、弁護士生命を絶たれてしまった。「違います！ 男は盗んでなんかいません、この車の所有者者ほどにはね、男ははなはだ困窮していたのです、というもある日——」（Tb: 734）

「なんじ盗むなかつ」という聖書の戒めは、車を盗んだ人間に向けられたものではなく、車を盗まれた所有者のほうに向けられたものであった。本当の盗人は富める者であって、貧しさゆえに盗んだ者ではない——フリッシュは弁護士シンツの姿を借りて、いわば貧しき人々を絶対的に弁護し、富める人々を絶対的に非難したのである。じつは『ビーダーマンと放火魔たち』においても、このようなフリッシュの義憤は意外な人物——放火魔アイゼンリング——の口を借りて表現されている。第3場の冒頭部分でシュミッツは、ビーダーマンが警察を呼ぶのではないかと心配するが、そのシュミッツに相棒アイゼンリングは、その心配はない、警察を呼んだら彼自身も罰せられてしまうからと言う。「どんな市民も罰せられてしまうんだ、正確に言えば、ある一定以上の収入がある人はね」。(348)「罰せられてしまう (strafbar)」とはこの場合、警察に物理的な意味で捕まることを意味するのではなく、一種の比喩的な用法であると考えたほうがいいだろう。一定以上に富める者はそれだけで罪びとである。ビーダーマンはこの「罪」をうすうす感じとっていたからこそ、ついに警察を呼ぶことはなかったのかもしれない。

資本主義における「自由」の欠如は、フリッシュによれば貧困が原因であった。ところがこの「貧困」は、独立した貧しさというよりはむしろ、富める者が社会の富を独占した結果として生みだされたものである。富める者が豊かであるからこそ貧困が存在するという理屈は、「自由」の問題を本稿の主題である経済格差の問題へと転換していくだろう。

3.3. 自由はどこにも存在しない——「教訓なき教訓劇」

前節で言及した資本主義と共産主義に対するフリッシュの批判を、ここでもう一度整理しておきたい。共産主義においては経済格差が存在しない代わりに、あるいはむしろ経済格差を存在させないがために、「圧政」すなわち国家の強力な介入が必要となる。この意味において思考と表現の自由は、いわば政府によって直接的に奪い取られている。いっぽうで資本主義においてはこれらの自由は、一見したところ担保されているようにも思われる。ところが市場原理に基づく自由競争は必然的に富める者たちを生み、さらには富める者たちの搾取の犠牲者として貧しい者たちを生む。貧困は物資の窮乏ということにとどまらない。物資の窮乏は職業選択の自由を奪い、

また精神がペンに奪われることによって、ひいては思考の自由をも奪ってしまう。⁵⁰

それではそもそも資本主義と共産主義の両イデオロギーは、『バーレスク』(1948) から『ピーダーマンと放火魔たち』(1958) へと至る時代の世界地図において、具体的にどのような位置を占めていたのだろうか？ ここではフリッシュの個人史からはひとまず離れて、当時の一般的な状況を概観しておきたい。連合国と枢軸国の争いであった第二次世界大戦が1945年に終了し、平和が訪れたかに見えたのもつかの間、世界はまたもや新たな対立構造へと巻き込まれていく。アメリカ合衆国を中心とする西側ブロックとソビエト連邦を中心とする東側ブロックが、全面的な武力衝突には至らなかったものの互いに鋭く対立し、世界をふたたび危機に陥れた。いわゆる冷戦の勃発である。すでに触れたチェコスロバキアの政変(1948)は、チェコスロバキアが東欧のなかでは政治的にもっとも西欧に近いとみなされていたこともあり、西側諸国にとりわけ大きな衝撃を与えた。これよりのちソビエトによる西ベルリン封鎖(1948-1949)、西側諸国によるNATOの創設(1949)、ソビエトによる核実験の成功(1949)、中国における共産主義政権の誕生(1949)、朝鮮戦争(1950-1953)などの政治的事件が連続し、冷戦は深刻の度合いを増してゆく。スターリンの死去(1953)によって一時的な雪解けムードが演出されたものの、ワルシャワ条約機構の締結(1955)、ハンガリー動乱(1956)など東西のこらみ合いは相変わらず続いていた。

ところで第二次世界大戦などの先立つ戦争と比較して、この冷戦は全面的な武力衝突を伴わない「冷たい」戦争であったこと以外に、もうひとつの大きな特徴を持っていた。それは資本主義対共産主義というイデオロギー対立を背景としていたことである。それぞれのイデオロギーを代表する二大強国、アメリカとソビエトの有無を言わせぬパワーポリティクスに巻き込まれる形で、とりわけヨーロッパの多くの国々は、否応なしにどちらかの陣営を選択するよう迫られたのであった。⁵¹ そしてまさにこのアメリカとソビエトによって「引き裂かれてしまった」世界こそ、『ピーダーマンと放火魔たち』で想定されている舞台背景ではないだろうか。⁵² 厄介なことにこれらふたつの陣営は、単純に立場が異なるというだけではなく、それぞれふたつの極端を意味していた。アメリカを選ぶのかソビエトを選ぶのか、それは資本主義を選ぶのか共産主義を選ぶのかと

⁵⁰ ここで述べられている資本主義と共産主義それぞれのメカニズムを、とりわけ経済的領域にのみ限定した場合、自由と平等の両立可能性の有無という問題圏に接続していくことになるだろう。経済的な自由と経済的な平等の背反については、柄谷行人『戦前』の思想』講談社学術文庫 2001 年、69-98 頁が参考になる。柄谷はここでフランス革命のもうひとつのスローガンであった「友愛」が、美学的な装置として「自由」と「平等」の矛盾を止揚するメカニズムに言及し、この弁証法こそがファシズムの本質であると指摘している。

⁵¹ 永世中立国であるスイスでも反共の嵐が吹き荒れた。Vgl. Bircher, Urs: *Mit Ausnahme der Freundschaft. Max Frisch. 1956-1991*. Zürich 2000, S. 13ff.

⁵² とはいえフリッシュ自身はこの「引き裂かれた世界」においても、特定の政党やイデオロギーからは一定の距離を取り続けた。Vgl. Arnold, S. 55; Bircher, S. 18f.

いう両極の選択であり、さらにそれはどのような自由を選ぶのか、ことばを換えれば、どのような不自由を忍ばねばならないかの選択でもあった。さらには選択したはずの自由さえも、決して自由に、つまり主体的に選び取られたものではなかったのである。

今までも述べてきたようにビーダーマンは、典型的な資本主義社会の住人である。資本主義社会の構成員をブルジョアとプロレタリアートに分けるとするならば、毛生え薬工場を営んでひとやま当て、豪華な装飾品に囲まれて優雅な暮らしを送るビーダーマンは、これまた典型的なブルジョア階級に所属している。典型的な資本主義社会の典型的なブルジョアであるビーダーマンはしかし、果たしてこの社会を積極的に選択したのだろうか、そして自分がその社会で特権的な地位にあることを、心から享受しているのだろうか。ビーダーマンが名に恥じぬ程度にまじめで誠実な人間であったとすれば、おそらく次のようなことに気付いていたはずである。自分の生きる社会は実際には、国際政治の力学によって割り当てられたものであって、したがって唯一絶対のものではないこと。ほかの場所には別の社会が存在していること。弱者を搾取することによって成功を収めている自分のような存在を、この別の社会はきっと非難するに違いないこと。もちろんビーダーマンはこれらの「気付き」を自覚的に意識し、それを政治的行動につなげていくようなタイプの人間ではない。むしろ皮肉化された意味での *bieder* な人間として、これらの「真実」をあえて無意識の領域に押しやってしまうことで、つつがなく日常を過ごそうとしている。けれどもわたしたちは2章までの議論ですでに、放火魔とビーダーマンのあいだの貧富の差が、ビーダーマン宅の入り口の扉を、居間の扉を、そして屋根裏部屋の扉を次々に開け放っていくさまを確認してしまった。ビーダーマンが自分の所属する社会を、その優勝劣敗のイデオロギーを、弱者の犠牲のもとに得た自分の優位を全面的に肯定していたとするならば、ビーダーマン宅の扉は固く閉ざされたままだったはずである。⁵³ このように考えれば第4場のビーダーマンのセリフ「わたしは階級格差なんか信じません!」は、あながち単純にタクティカルな発言(「友達作戦」)ではなく、みずからの不当な立場に対するやましきの表明であると同時に、格差のない「もうひとつの国」に向けられた憧れの吐露であったのかもしれない。

有名な逸話を紹介したい。1937年の秋、作家としてではなく建築家として生きていくことを

⁵³ 既出『寓話とは何か』(1976)においてフリッシュは、ある興味深い事例を報告している。1963年の『ビーダーマン』のニューヨーク公演は失敗に終わったが、フリッシュはこの失敗の理由を次のようなものであると「聞いた」と言う。「わたしのビーダーマンはやましい良心を持っていたが、それは彼が古くからの従業員を容赦なく解雇したからだ。彼が自分の恐れている放火魔たちを、偽りの親切心でもって家に泊めざるを得なくなったのは、まさにこの良心ゆえだった——ところがアメリカのビジネスマンはこの良心を持たず、「ビジネスは自由競争だ (free enterprise ist free enterprise)」というのである。この喜劇『ビーダーマン』が最初からつまづいたのはこんな理由だった。」Vgl. Frisch (1976) – Zit. nach: Schmitz, S. 70-74, hier S. 72. フリッシュが「聞いた」この理由にある程度の信を置くならば、ビーダーマンが仮にアメリカ人だったならカストロは起こらなかったということになるだろう。

決意したフリッシュは、今までに書き溜めていたものをすべてみずから燃やしてしまった。「一度こういうことがあった。書いたものをすべてひとまとめにして紐でくくり、日記も含めて、すべて火にくべてしまったのである。わたしは森に二度も行かねばならなかったが、それほど多くのものを書き溜めていたのだった。まだ覚えているが、その日は雨だったので、濡れてしまって火は何度も消えた、わたしはマッチ箱をまるまるひと箱使うはめになった」。(Tb: 588)

Julian Schütt はこの逸話に関連して、フリッシュのある注目すべき性癖を指摘している。「ここでフリッシュのある種の放火癖 (eine gewisse pyromanische Lust) に言及しておかないわけにはいかないだろう、この嗜好に関しては近しく彼と交際した人々が、ほとんどみな口をそろえて証言している」。⁵⁴

フリッシュの放火癖——これは何を意味するのだろうか？ Schütt はこの「意味」を解明するために、まず次のような事実と言及する。フリッシュが筆を折る決意をしたとき——つまりこの「焚書事件」——と、スイス作家協会への入会が、ほぼ同時期だったことである。「原稿を焼却してもう決して書かないという誓いをしてから、作家協会に入会するまでには、たかだか3か月しか経っていなかった」。⁵⁵ つまりもう書かないという誓いが、作家協会に入会し、書く仕事に今まで以上に携わる直接のきっかけになったとみて、Schütt は次のように結論付けている。「彼は作家としてさらに活動を続けていこうと思っていたのだ、『緑のハインリヒ』体験⁵⁶のあとではいっそう熱心に、ただし今までとは違ったやりかたで。燃やしてしまうことで彼は、それまでの作品をシンボリックに消し去ったのである、新しく始めることができるように」。⁵⁷

わたしたちはここでまず、ビーダーマンが Jedermann (誰でも) であったことを思い出したい。さらに『ラジオ劇ビーダーマン』に登場する「作者 (Verfasser)」が、ビーダーマンは「わたしたちみんな」であり、また「わたし自身」でもあると言っている (HB: 299) ことを参考にしてもよいだろう。つまりビーダーマンは、ほかならぬフリッシュ自身でもあったと考えられよう。また 1978 年の『放火魔は誰なのか』においてフリッシュは、放火魔たち (シュミッツとアイゼンリング) をデーモンの一員であるとして、「彼らはゴットリーブ・ビーダーマン本人から生まれたのだ」⁵⁸ と述べている。シュミッツとアイゼンリングが「純粋な楽しみから」火をつけた放火マニア (Pyromane) であつたことと、フリッシュに同じく放火癖があつたことを考えあわせると、放火魔 2 人はゴットリーブ・ビーダーマンを通じて、やはりフリッシュ自身でもあつたのである。そして第三の放火魔・インテリの Dr. phil. の姿に、フリッシュの「自嘲

⁵⁴ Schütt, Julian: *Max Frisch. Biographie eines Aufstiegs. 1911-1954*. Berlin 2011, S. 224f.

⁵⁵ Schütt, S. 229.

⁵⁶ フリッシュがこの時期に読んで、「最良の父」と名付けた作品である。(Tb: 587)

⁵⁷ Schütt, S. 229.

⁵⁸ Frisch(1977/1978) – Zit. nach: Schmitz (1979), S. 74f.

(Selbstironie)」という形で自己投影を見る Bänziger の解釈にも注目したい。⁵⁹ また Kuhn は当時のインテリの代表としてサルトルの名を挙げ、サルトルが社会主義ソビエトに肩入れしていたことと、フリッシュがチェコスロバキアの社会主義を高く評価していたことを重ね合わせているが、⁶⁰ この解釈は「Dr. phil. =サルトル=フリッシュ」という回路で Dr. phil. とフリッシュをつなぐ。⁶¹ つまりビーダーマンと放火魔たち、そして Dr. phil. は、すべて作者フリッシュの分身であったとみなしうるだろう。ここで放火との関連で言えば、シュミッツとアイゼンリングが主犯であったことは論を俟たないとして、たとえば Dr. phil. に関してはどうか。主犯の二人とは犯行の動機こそ違うものの、彼もまた共同で放火を画策したれっきとした放火魔である。さらにはビーダーマンも——第4場でアイゼンリングが導火線の長さをはかったとき、ビーダーマンが一方の端を持つことで、結果的に放火に協力したことを思い出したい。また最終場面で乞われてマッチを差し出したこと、これが結果的に、そして最終的にカストロフを招いたことを思い出したい。だがここで問われるべきは、次のような本質的な問いである——本当に結果的にだろうか？ ビーダーマンはひょっとしたら、シュミッツとアイゼンリングのように、そして Dr. phil. のように、自分から積極的に火を放ったのではあるまいか？ ビーダーマンがフリッシュの分身であって、フリッシュに放火癖があったことを思い出せば、ビーダーマンもまた「純粋な楽しみから」自分とその周辺を燃やし去ろうと思ったのではないか？

だが実際にはまた、ただ「純粋な楽しみから」だけではなかった。フリッシュの放火癖は単なる楽しみだけの問題ではなかったのである。Schütt によるとフリッシュにとって放火とは、「新しく始める」ための儀式であった。では何を始めるのだろうか？ この問いに答えるには、「では何を終わらせるのか？」を問えばよいだろう。「燃やしてしまうことで彼は、それまでの作品をシンボリックに消し去ったのである、新しく始めることができるように。」自分の家を、自分の町を燃やすことで、ビーダーマンがシンボリックに消し去ろうとしたもの——ビーダーマンの家、ビーダーマンの町が象徴しているもの——本章がこれまで明らかにしてきたように、それは資本主義社会であった。

Alexander Stephan によると 1930 年代の若きフリッシュは、詩人・作家に「時代を忘れる」という特権を認め、また自分自身に対しても作家として、この特権が適用されることを望んでい

⁵⁹ Bänziger はフリッシュが実生活で多くの抗議声明を発しながら、ときにそこから少し距離を取ろうとする態度に、火事のなか一方的に声明文を読み上げて観客席のほうに紛れ込んでしまう Dr. phil. の姿を見ている。

⁶⁰ Vgl. Kuhn (2002), S. 134. Kuhn はここで、「サルトル=フリッシュ=ビーダーマン」という等式を提案し、彼らをつなぐものは物事に対する「素朴な信じやすさ (Gutgläubigkeit)」であるとしている。

⁶¹ この解釈は Bertold Heizmann がすでに述べている。Vgl. Heinzmann, Bertold: *Max Frisch. Biedermann und die Brandstifter*. Stuttgart 2003, S. 53.

た。⁶² ところが1937年にフリッシュは上述の「焚書事件」を起こし、フリッシュの「自己物語」によれば、これをきっかけに作家の道を断念して建築家への道を歩み始めたのだった。実際にはSchüttも指摘するように文筆活動は続けられたが、とにかくにも建築家という職業が、フリッシュに「時代を忘れる」特権を放棄させたのである。フリッシュは自分が何をきっかけに「政治的な人間になった」(politisiert)のか、Arnoldとの会話で回想しているが、はじめは建築家として都市計画に携わったことだったという。都市計画は自然と政治的領域に通じていき、フリッシュはやがてこの仕事を通して、次のような「希望」を抱くようになった。「わたしは何か変えられるのではないかと思うようになった。それはたとえば、そもそもまったく私有財産を認めないということではなかったけれど、土地の私有制をなくしてはしまえないか、という希望だった」。⁶³

「時代を忘れる」資格を自分に認めていた非・政治的な若きフリッシュは、建築家の仕事を通していわばはじめて政治に興味を持ったが、そのときに抱いた「希望」は、私有財産を全く認めないということではないにせよ、「土地の私有制をなくす」という明らかに社会主義的な方向のものであったのである。フリッシュのナイーブな社会主義信奉は、チェコスロバキアの政変によって若干の修正を余儀なくされ、それが『バーレスク』という作品に結実したが、社会主義に共感する方向性自体は、先にArnoldとの会話でも確認したように、晩年にいたるまで変わることはなかった。

結論に進みたい。

『ビーダーマンと放火魔たち』は「教訓のない教訓劇」であり、この「教訓」とは、まず第一に次のような問いに対する答えでなければならなかった——放火を防ぐ方法は本当になかったのか？もしあったとすれば、それはどのようなものか？——ところで『ビーダーマン』で設定されている社会は、典型的な資本主義社会であった。するとこの「教訓」は次のような問いに対する答えとなるべきものであろう——資本主義社会をいかにして放火魔から守り抜くのか？とところがここでわたしたちが問うべきは、この「社会」に現れる主要な登場人物たちのいったい誰が、この問いを真剣に考えていたのかという点である。シュミッツとアイゼンリングは楽しみから放火する放火マニアであり、Dr. phil. はイデオロギー（おそらく共産主義）から資本主義社会を滅ぼそうとするテロリストであった。つまり彼らは放火を積極的に推進する役割を担っている。そこで「教訓」が「教訓」でありうるためには、これらのテロリストに抵抗して資本主義社会を守り抜く勢力が必要になるだろう。ところが肝心の作者フリッシュ——「教訓」を一意的にはないにせよ、可能性として観衆・読者に呈示できるのは彼のほか、いらない——の政治的立場を見

⁶² Stephan, Alexander: *Max Frisch*. München 1983, S. 20.

⁶³ Arnold, S. 51f.

てみると、彼は括弧つきではあるにせよ、生涯にわたって社会主義者であり続けた。つまり『ビーダーマン』の社会を最後まで守り抜こうとする意志が、作者自身にもともしなかつたのである。おまけに作者の放火癖は、近しい人がみな証言するところであつた。いわばフリッシュは万能の作者として「資本主義者」ビーダーマンに憑依し、外見上は体制の擁護者かつ放火の被害者であることを装いながら、実際にはシュミッツとアイゼンリングにみづから進んでマッチを渡し、彼らの片棒を担いで社会に火を放つことで、放火マニアの愉楽に酔いしれつつ、憎むべき格差の具現者・資本主義社会の没落を傍観したのではないだろうか。⁶⁴

「教訓」の可能性はまだ残っている。ひょっとするとこの作品は資本主義を単純に否定して、来たるべき共産主義の理想を指し示しているのではないか？『ビーダーマンと放火魔たち』の『Nachspiel』はしかし、この可能性をおそらく否定している。いったん灰燼に帰したかに見えた資本主義社会は、ここでより輝きを増して復活したのである。

コロス かつてよりも美しく、
かつてよりも豊かに、
天をも摩すモダンな高層ビル、
ガラスとクロムめっきの建造物たち、
けれども本当は古いままで、
ハレルヤ、
われわれの町は復活を遂げた！（414）

冷戦期の二極構造において、多くの国々はアメリカかソビエトかの二者択一を迫られたが、それは結局のところ、資本主義か共産主義いずれかの不自由を引き受けることでしかなかった。「自由」こそ人間の尊厳であると考えていたフリッシュにとって、最終的な「教訓」の存在する余地はなかつたのである。フリッシュの政治的理想「民主的な社会主義」は、現実世界においても、また現実世界を「寓話」として投影した『ビーダーマン』の世界においても、適当な場所を見出せないままであつた。

⁶⁴ Müller-Salget によれば、支配的システムに日々支配されている存在としての観衆は、既成のシステムを暴力によって破壊する放火魔に一種の快感を覚えるという。本稿の見解に近い立場だと言えるだろう。Vgl. Müller-Salget, S. 58.

Max Frischs *Biedermann und die Brandstifter*
— „Ein Lehrstück ohne Lehre“ aus wirtschaftlicher Sicht —

TERASAWA Daina

Mit *Biedermann und die Brandstifter* (1958) und *Andorra* (1961) wurde Max Frisch als Dramatiker ersten Ranges bekannt. In den 1960er Jahren war er jedoch nach und nach mit diesen Stücken unzufrieden. Ihre Handlungen erschienen ihm als zu gezwungen. Er bezeichnete deren Dramaturgie als eine „Dramaturgie der Fügung“ und versuchte mit der Zeit, ihr zu entgehen und eine neue zu finden.

Dieser Aufsatz versucht als erstes zu zeigen, in welchem Sinne der Begriff der Dramaturgie der Fügung auf *Biedermann* anwendbar ist. Dabei wird vor allem auf die wirtschaftliche Ungleichheit zwischen Biedermann und den Brandstiftern aufmerksam gemacht. In den ersten zwei Kapiteln soll gezeigt werden, wie sie Biedermann in die Katastrophe der Brandstiftung führt.

Wenn man davon ausgeht, dass die Handlung von *Biedermann* eine Zwangsläufigkeit aufweist und deshalb zur Dramaturgie der Fügung gehört, stellt sich im dritten Kapitel eine neue Frage, ob die Katastrophe wirklich unter allen Bedingungen unvermeidbar gewesen ist. In den ersten zwei Kapiteln wurde nur festgestellt, dass die Ursache (die wirtschaftliche Ungleichheit) die Folge (die Katastrophe) verursacht. Nun besteht doch auch die Möglichkeit, diese Folge zu verhindern. Wenn es sich bei der Ursache um die wirtschaftliche Ungleichheit handelt, könnte es sein, dass sich die Katastrophe vermeiden ließe, indem man die Ungleichheit auflöst. Dabei ist jedoch keineswegs ausschließlich von der Ungleichheit zwischen Biedermann und den Brandstiftern die Rede. Denn Biedermann ist jedermann, wie sich ein Brandstifter in einem Spiel im Spiel äußert. Auch wenn die Ungleichheit zwischen dem Fabrikanten Biedermann und zwei Brandstiftern namens Schmitz und Eisenring aufgelöst wird, können Brandstiftungen immer und überall stattfinden, können Biedermänner und Brandstifter doch auch immer und überall sein.

Folglich muss man alle Mitglieder der Gesellschaft im wirtschaftlichen Sinne gleichmachen, um dieser Art der Brandstiftung vorzubeugen. Hierbei liegt der Kommunismus nahe, der als Ideologie das Privateigentum abzuschaffen fordert, um dadurch eine Gesellschaft ohne wirtschaftliche Ungleichheit zu schaffen. In diesem Zusammenhang ist es von Bedeutung, dass die Prosaskizze *Burleske*, die 1948 entstand und später als Erzählkern von *Biedermann* identifiziert worden ist, anlässlich der Ereignisse bei der Machtergreifung der Kommunisten in der ehemaligen Tschechoslowakei geschrieben wurde. Angesichts dieser Entstehungsgeschichte ist *Biedermann* immer wieder als ein antikommunistisches Stück interpretiert worden, eine Auslegung, die in den letzten Jahren in Kritik geraten ist. Die Interpretation des Stückes als antikommunistisch scheint aber immer noch gerechtfertigt zu sein, wie ich in diesem Aufsatz darlegen möchte.

Weshalb lautet der Untertitel des *Biedermanns* „Ein Lehrstück ohne Lehre“? Um Brandstiftungen vorzubeugen muss eine kommunistische Gesellschaft aufgebaut werden. Die Kommunisten, die die kommunistische Gesellschaft ermöglichen, sind jedoch selbst die Brandstifter. In diesem Paradoxon besteht das Wesen des *Biedermanns*, des „Lehrstück ohne Lehre“.